

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書 2

- 戸切遺跡 第3次調査 -

- 戸切遺跡 第4次調査 -

- 兵庫遺跡 第2次調査 -

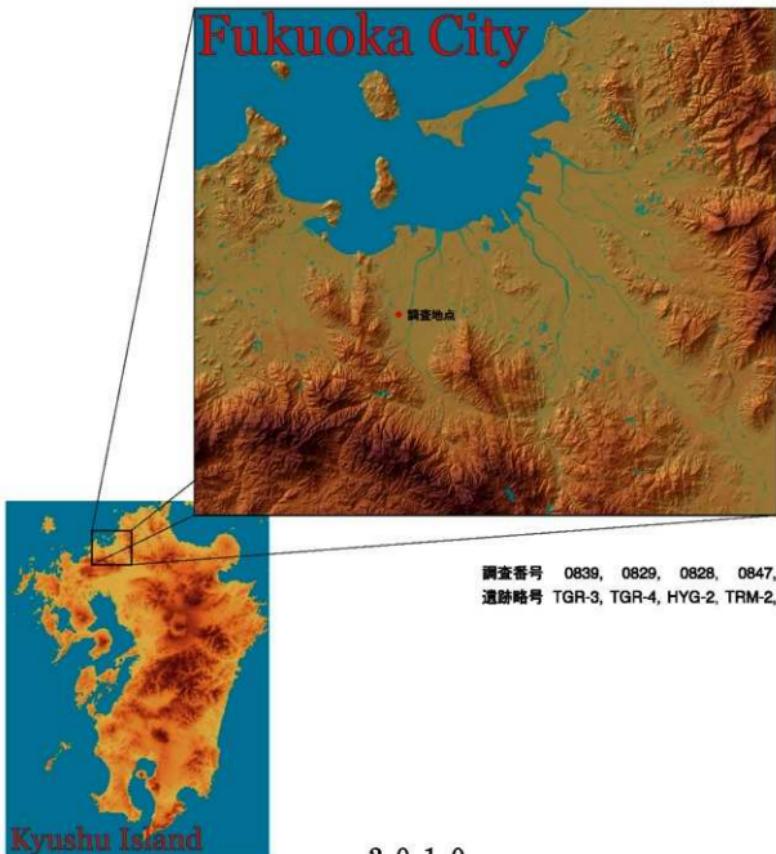
- 戸切巡り町遺跡 第2次調査 -

2010

福岡市教育委員会

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書 2

- 戸切遺跡 第3次調査 -
- 戸切遺跡 第4次調査 -
- 兵庫遺跡 第2次調査 -
- 戸切巡り町遺跡 第2次調査 -





卷頭図版 道路改良工事計画地周辺航空写真
2008(平成 20)年 2月 19日撮影

序

福岡市は、豊かな自然環境と地理的条件にも恵まれ、古くから大陸の先進文化を受け入れる窓口として栄えてきました。市内には最古の稻作の村である板付遺跡、古代の迎賓館である鴻臚館、貿易都市博多などの貴重な文化財が残されています。福岡市教育委員会では、開発工事に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存と保護措置に努めているところです。

本書で報告する西区戸切周辺では、これまでに弥生時代から中世にかけての集落跡などが調査されており、当時の生活用具であるたくさんの土器や石器などの遺物が出土しています。

今回の道路改良工事に伴う調査では、二つの遺跡が新たに発見され、古墳時代を中心とする遺物が見つかり、この地域の歴史を解明する上でたいへん貴重な発見となりました。

本書の刊行が、市民の埋蔵文化財に対する理解を深めるための一助となるとともに、学術研究の分野でも役立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の発掘調査に際しご理解とご協力いただいた道路下水道局、地元住民の方々をはじめ、関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成 22 年3月 23 日

福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣

例 言

- (1) 本書は、福岡市教育委員会が平成 20 (2008) 年度に西区戸切2丁目地内で、実施した市道戸切通線（戸切）道路改良工事に伴う発掘調査報告書である。
- (2) 今回報告する戸切遺跡第3次、第4次調査成果の理解を深めるため、戸切遺跡第1次調査の概要を周辺調査概要として本報告書に掲載した。また、兵庫遺跡第1次調査出土木製品の樹種同定報告を掲載した。
- (3) 遺構の実測・写真撮影は各担当者が行い、セスナ機による空中写真撮影は株式会社バスコが、兵庫遺跡第1次調査出土木製品の樹種同定はパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
- (4) 本書に使用した方位は座標北（世界測地系）であり、今回の調査・報告に係るレベル値は老岐南小学校内ベンチマーク（標高 11.848 m）を使用した。
- (5) 調査に係る記録類、出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵・保管し、活用されていく予定である。
- (6) 本書の執筆は、戸切遺跡第1次調査の概要を山崎純男が、戸切遺跡調査地点図と戸切遺跡第4次調査を森本幹彦が行い、それ以外と編集は加藤隆也が行った。

戸切遺跡第3次調査

遺跡調査番号	0839	遺跡略号	TGR-3
地番	福岡市西区戸切2丁目地内	分布地図番号	戸切 92
調査対象面積	—	調査面積	105m ²
調査期間	平成 20 年 9 月 1 日～平成 20 年 9 月 12 日		

戸切遺跡第4次調査

遺跡調査番号	0829	遺跡略号	TGR-4
地番	福岡市西区戸切2丁目地内	分布地図番号	戸切 92
調査対象面積	—	調査面積	70m ²
調査期間	平成 20 年 8 月 4 日～平成 20 年 8 月 8 日		

兵庫遺跡第2次調査

遺跡調査番号	0828	遺跡略号	HYG-2
地番	福岡市西区戸切2丁目地内	分布地図番号	戸切 92
調査対象面積	—	調査面積	370m ²
調査期間	平成 20 年 8 月 1 日～平成 20 年 9 月 23 日		

戸切巡り町遺跡第2次調査

遺跡調査番号	0847	遺跡略号	HRM-2
地番	福岡市西区戸切2丁目地内	分布地図番号	戸切 92
調査対象面積	—	調査面積	121m ²
調査期間	平成 20 年 10 月 16 日～平成 20 年 10 月 23 日		

本文目次

第1章 はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2
第3章 戸切遺跡	
第1次調査の概要 (山崎)	
1. はじめに	5
2. 確認遺構の概要	5
第3次調査 (加藤)	
1. 調査の概要	7
2. 遺構と遺物	7
3.まとめ	9
第4次調査 (森本)	
1. 調査の概要	13
2. 遺構	13
3. 遺物	15
4. 小結	15
5. 第5次調査の概要	16
6.まとめ	22
第4章 兵庫遺跡第2次調査	
1. 調査の概要	23
2. 遺構と遺物	23
3.まとめ	26
4. 第1次調査出土木製品の樹種同定	29
第5章 戸切巡り町遺跡第2次調査	
1. 調査の概要	35
2. 遺構と遺物	35
3.まとめ	38

挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図と市道戸切通線工事計画図 (1/7,500)	3
Fig. 2 戸切遺跡調査地点図 (1/1,000)	4
Fig. 3 戸切遺跡第3次調査遺構配置図 (1/400)	6
Fig. 4 戸切遺跡第3次調査遺構配置図 (1/120)	8
Fig. 5 戸切遺跡第3次調査出土遺物実測図 (1/3)	9
Fig. 6 4次調査区全体図 (1/80)	13
Fig. 7 4次調査区と5次調査区全体図 (1/150)	14
Fig. 8 01 実測図と調査区南壁土層図 (1/40)	15
Fig. 9 01、12 出土遺物 (1/3)	15
Fig. 10 52、58 実測図 (1/30)	16
Fig. 11 52、58 出土遺物 (1/3)	16
Fig. 12 51 実測図 (1/40)	17
Fig. 13 51 出土遺物 (1/3)	18
Fig. 14 兵庫遺跡第2次調査遺構配置図 (1/120)	24
Fig. 15 兵庫遺跡第2次調査区及び周辺遺構配置図 (1/300)	折り込み
Fig. 16 SB-01 実測図 (1/40)	25
Fig. 17 兵庫遺跡第2次調査出土遺物実測図 (1/3)	26
Fig. 18 戸切巡り町遺跡第2次調査区及び周辺遺構配置図 (1/200)	36
Fig. 19 戸切巡り町遺跡第2次調査遺構配置図 (1/100)	37
Fig. 20 戸切巡り町遺跡第2次調査出土遺物実測図 (1/3)	38

図版目次

巻頭図版 道路改良工事計画地周辺航空写真 2008(平成20)年2月19日撮影

戸切遺跡第3次調査

Ph. 1 西側調査区全景（東から）	10
Ph. 2 西側調査区北側壁面状況（南西から）	10
Ph. 3 東側調査区全景（東から）	11
Ph. 4 東側調査区北側壁面状況（南東から）	11
Ph. 5 SK-05 遺物出土状況（南西から）	12
Ph. 6 出土遺物（縮尺不同）	12

戸切遺跡第4次調査

Ph. 7 4次・5次調査地点調査前風景（北東から）	19
Ph. 8 戸切遺跡4次調査区全景（上が東）	20
Ph. 9 戸切遺跡4次調査区全景（上が南）	20
Ph. 10 調査区西部の01周辺（北から）	21
Ph. 11 01（南から）	21
Ph. 12 調査区南壁、01の土層（北から）	21
Ph. 13 5次調査全景（西から）	22

兵庫遺跡第2次調査

Ph. 14 調査区全景（西から）	27
Ph. 15 調査区東側遺構検出状況（西から）	27
Ph. 16 SB-01検出状況（北から）	28
Ph. 17 出土遺物（縮尺不同）	28

戸切巡り町遺跡第2次調査

Ph. 18 調査前風景	38
Ph. 19 調査区全景（南東から）	39
Ph. 20 調査区全景（南西から）	39
Ph. 21 遺構面断ち割り状況（南西から）	40
Ph. 22 出土遺物（縮尺不同）	40

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯

2007（平成19）年1月、福岡市土木局道路建設部（現：道路下水道局道路整備部）から教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課へ市道戸切通線（戸切）道路改良工事計画に伴い、西区戸切地内の埋蔵文化財について事前審査の依頼があった。当課では、計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地および隣接地を含むことから、対象地について遺跡の遺存状態確認のため試掘確認調査が必要であると判断し、土木局道路建設部と協議を重ね、試掘可能な地点から試掘確認調査を実施した。第1回目の試掘調査は、6月から行った。

試掘調査は現在も行われており、当時の試掘範囲も計画地の一部であったが、周知の埋蔵文化財包蔵地以外にも新たに2箇所の埋蔵文化財の遺存する範囲が確認された。そのため、各地点の旧小字名をとり、それぞれ上籠遺跡・兵庫遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地への登録手続きを行った。

今回報告する埋蔵文化財発掘調査は、平成20（2008）年度に行ったものであり、計画地内の埋蔵文化財発掘調査は今後も継続して行われる。

2. 調査の組織

調査の体制は以下のとおりである。

調査主体	福岡市教育委員会	教育長	山田裕嗣
調査総括	文化財部埋蔵文化財第2課	課長	力武卓治（前任） 田中壽夫（現任）
	埋蔵文化財課第2課	調査第1係長	杉山富雄
	埋蔵文化財課第2課	調査第2係長	常松幹雄（前任） 吉留秀敏（現任）
庶務担当	文化財管理課	管理係	井上幸江（前任） 古賀とも子（現任）
事前協議	埋蔵文化財第1課	事前審査係長	吉留秀敏（前任） 宮井善朗（現任）
		事前審査係	星野恵美（前任） 安部泰之（現任）
調査担当	埋蔵文化財第2課	調査第1係	加藤隆也
	埋蔵文化財第2課	調査第2係	森本幹彦

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

今回の調査地点が位置する早良平野は、西側を背振主稜から北に派生した西山・飯盛・高祖山地に、東側を同じく北に派生する油山山地と更に北に延びる飯倉台地によって画され、中央部には背振山地を源流とする室見川が北流し、博多湾へと注いでいる。平野の北辺には蛭浜をはじめとする第三紀層の小丘陵群が散在し、これらを繋ぐように砂丘が形成され、背後には沖積低地が広がっている。また、両山地の山麓部や平野中央部には中位段丘下位礫面が残され、小田部台地にはこの上位に火山灰層が残存している。低位段丘の多くは室見川の扇状地平野・三角州平野部に埋没している。

戸切遺跡群は室見川中流域西岸で名柄川、十郎川の沖積低地間、これらに開拓された低位段丘礫台地の残丘上に立地する。標高は9~14 mである。

早良平野の旧石器時代は各遺跡から表面採集の遺物が知られており、有田遺跡の調査では石器包含層が検出されたほか、吉武遺跡群の調査でも出土している。縄文時代では、草創期から中期の遺跡はいまだ不明確であり、後期を主体とする四箇遺跡の調査が最初である。平野の沖積低地部では夜臼式単純期から弥生時代初頭の初期農耕期の遺跡が多く、室見川東岸に有田遺跡・有田七田前遺跡・免遺跡・次郎丸遺跡、西岸では橋本一丁田遺跡・牟多田遺跡・拾六町平田遺跡・拾六町ツイジ遺跡・石丸古川遺跡・湯納遺跡が分布する。有田七田前遺跡では多量の夜臼式期の遺物が、有田遺跡では台地上に弥生時代初頭の環溝集落が、免遺跡では平野内で最古の突帯文期の土器が多量に出土し、橋本一丁田遺跡では夜臼式単純期~弥生時代初頭の河川から土器・木製農具等の出土がみられ、拾六町ツイジ遺跡では弥生時代初頭の土壤から木製農具等が出土し、拾六町平田遺跡では家形土製品が出土している。また、平野奥部の東入部遺跡では夜臼式の大型壺を組み合わせた晩期末の埋葬施設が検出されている。

弥生時代になると遺跡数が増大し、前期初頭には有田台地に環溝集落遺跡が出現する。この集落は200×300 mの環濠を有する大規模なもので、早良平野における前期最大の集落である。このほか前期の遺跡としては、十郎川に面する沖積地上に位置する石丸古川遺跡があり、突帯文土器をはじめ多くの遺物が出土している。この時期の埋葬施設は有田遺跡をはじめ海岸部の藤崎遺跡、平野中央部の田村遺跡などで調査されている。前期末から中期初頭の集落遺跡は平野全城に拡大しており、埋葬施設は藤崎遺跡・吉武高木遺跡・東入部遺跡などにみられる。中期から後期の遺跡は野方中原遺跡・野方塚原遺跡・野方久保遺跡などが近隣では知られている。

古墳時代の集落遺跡は、平野の低地部や低位段丘部に戸切遺跡・湯納遺跡・拾六町ツイジ遺跡・四箇遺跡・原遺跡・田村遺跡・免遺跡・次郎丸高石遺跡・重留村下位面などがある。海岸の砂丘上には生ノ松原遺跡・西新町遺跡などがみられる。室見川の中流域西岸の山麓部から広がる中位段丘や下位面の残丘上には「早良王墓」といわれる吉武遺跡群や、野方中原遺跡・野方久保遺跡・羽根戸遺跡・太田遺跡・広石C遺跡・都地遺跡・金武城田遺跡・浦江遺跡・浦江谷遺跡がある。東岸の段丘や下位面残丘の台地上には有田遺跡・飯倉遺跡・野芥遺跡・梅林遺跡・東入部遺跡が分布しており、その上流に集落は展開していない。平野の東側丘陵部および西側丘陵において数多くの群集墳が調査されている。海岸部においては方形周溝の藤崎遺跡が調査され、平野部においては帆立貝式の樋渡古墳や拌塚古墳が調査されたほか、吉武遺跡群でも中期から後期の古墳群が調査されている。また、重留遺跡東側丘陵上の重留古墳C群の調査では6世紀前半の須恵器窯が検出されており、本集落などに供給されていた可能性がある。

古代から中世の遺跡も平野全体にみられる。現在、駅や郷家・郷倉が特定された遺構は確認されておらず、有田遺跡検出の大型建物群を早良郡衙と推定するにとどまっている。

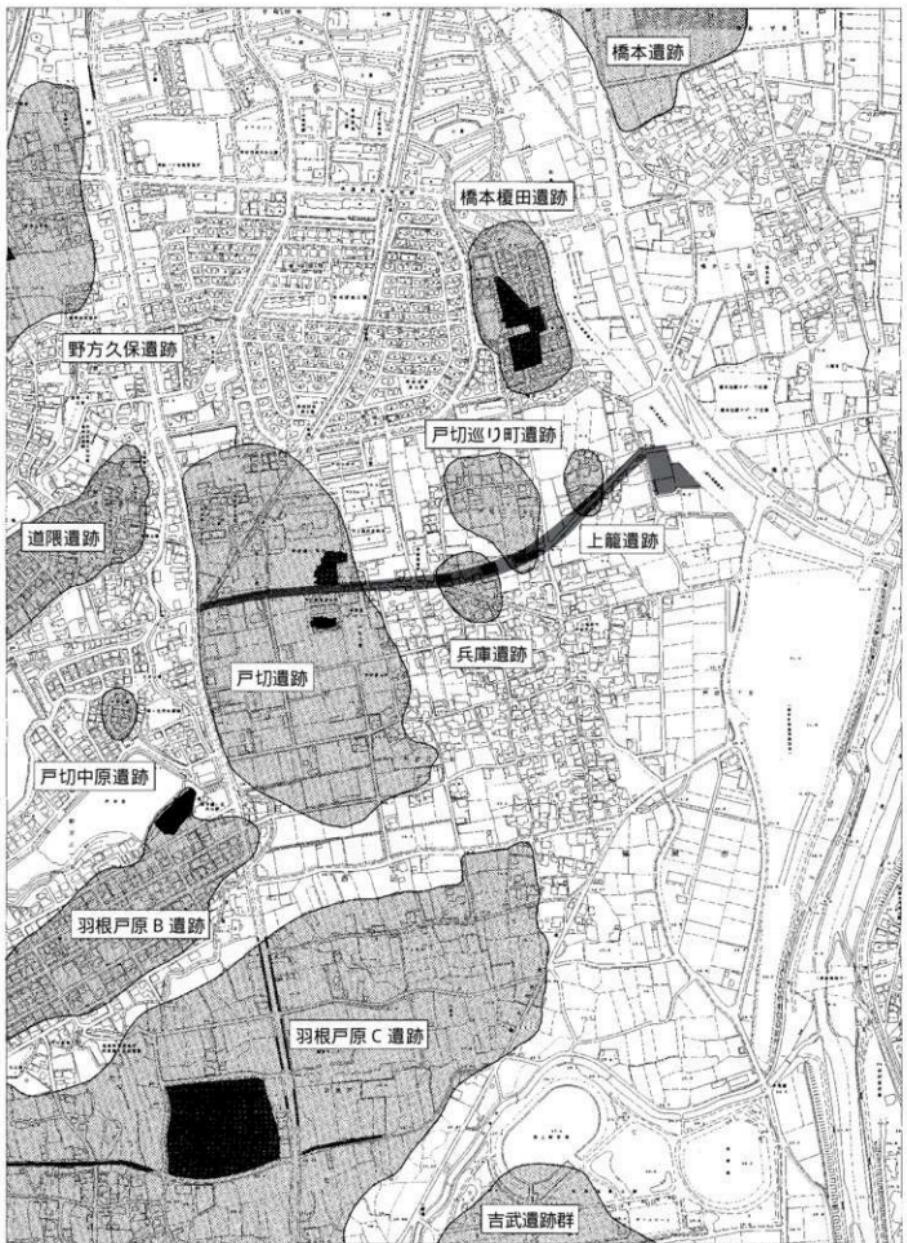


Fig. 1 周辺遺跡分布図と市道戸切通線工事計画図 (1/7,500)

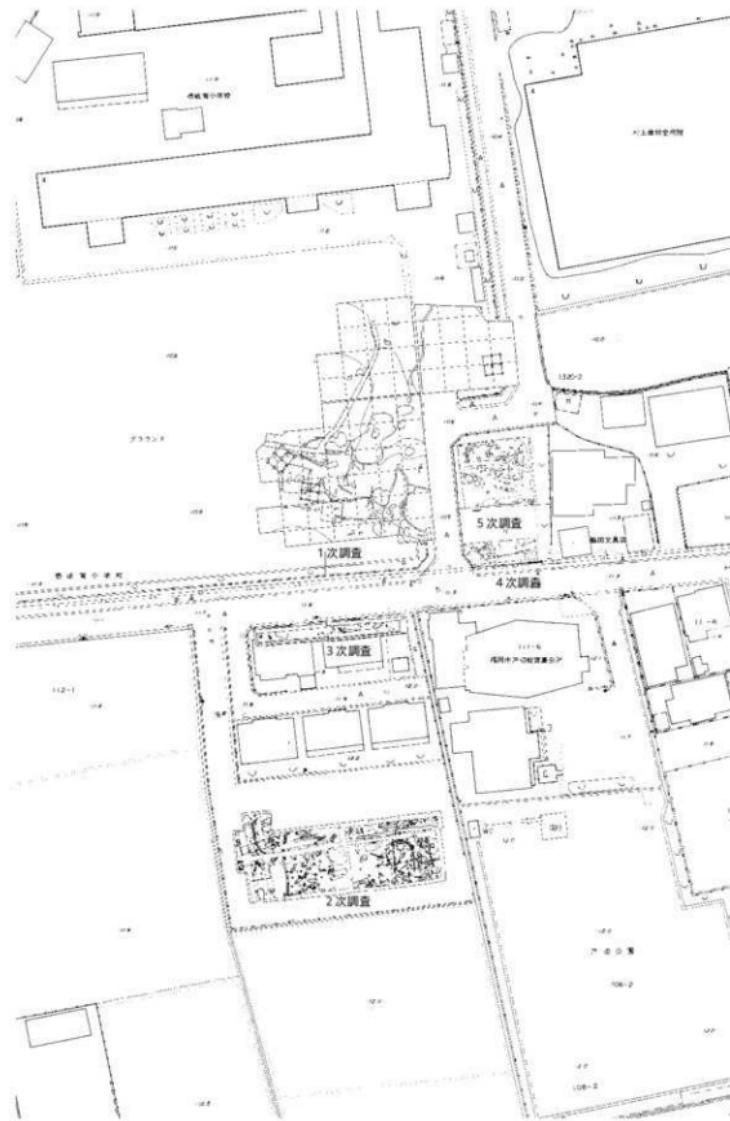


Fig. 2 戸切遺跡調査地点図 (1/1,000)

第3章 戸切遺跡

第1次調査の概要

1. はじめに

戸切遺跡群の第1次調査は福岡市立老岐南小学校の新設に伴う事前調査として、1974年11月6日～1975年2月4日にかけて発掘調査を実施した。おりしも福岡市においては市民の急増に伴い小学校が不足し、年に5～6校の開校が予定されていて、学校建設予定地の埋蔵文化財の調査も開校予定の半分は発掘調査が必要であった。当時の文化財調査の担当課である文化課では発掘担当者の確保が困難であったが、開校を間に合わせるために、市内遺跡の調査後の整理・報告書作成を後回しにして発掘調査を優先させて実施する状況が続いた。本遺跡もその状況に巻き込まれたもので、いまだに報告書は未刊行である。よって、ここに遺跡の概要を報告しておくことにする。

2. 確認遺構の概要

発掘調査区は上記の理由から遺構密度の濃い運動場側を調査対象とし、遺構密度が薄く2m以上の盛り土がある校舎側の敷地は、破壊の程度が少ないために調査区対象区からはずすことになった。よって、調査は運動場のみについて実施した。対象区の運動場に東西にA～W列、南北に1～10列の各区の一辺5mのグリッドを設定して人手によって調査を進めた。調査区の現況は水田となっていたが、調査区の西側は緩やかに低くなり谷状をなし、遺構の存在は希薄であった。よって本格的な調査はM列より東側について実施した。調査区は周囲よりやや高くなり東側に向かって平坦面が続くが、北側は全体に低くなる。調査区を中心に舌状の高まりとなっている。遺構はこの高まりを中心に展開している。確認した遺構は竪穴住居址3棟、倉庫と考えられる掘立柱建物3棟、土抗10基、溝多数である。時期的には古墳時代から古代にかけての遺構である。

SC-01 (第1号住居址)

O-2・P-2区に検出した竪穴住居址である。東西4.2m×南北4.0mの方形プランをなす。深さは5～8cm、極めて遺存状態は悪い。南壁・西壁・北壁と東壁の一部に壁溝があるが、全周していない。床面に4本の主柱穴がある。SD-08を切っている。

SC-02 (第2号住居址)

N-3・4、O-3・4区にわたって検出した竪穴住居址である。東西5.2m×南北5.7mの方形プランをなす。深さは4～10cm、極めて遺存状態は悪い。中央部に170cm×135cmの皿状の楕円形の土抗があり炉址と考えられる。主柱穴は炉を挟んで対角線上に2個が確認できるが、他は確認できない。SD-11を切り、SB-01・02に切られている。

SC-03 (第3号住居址)

P-3区に確認した。4本の主柱穴が確認できるのみである。壁が削平で失われているが竪穴住居址と考えられる。柱穴の配置からすると、第1号住居址と同規模ないしはやや大きいと考えられる。SD-13と重複関係にあり、SD-13を柱穴が切っている。

SB-01 (第1号掘立柱建物)

N-3・O-3区に検出した2間×2間の總柱建物である。東西3.4m、南北3.5mの建物である。SC-02とSD-10等と重複関係にあり、いずれもSB-01の柱穴が切っている。

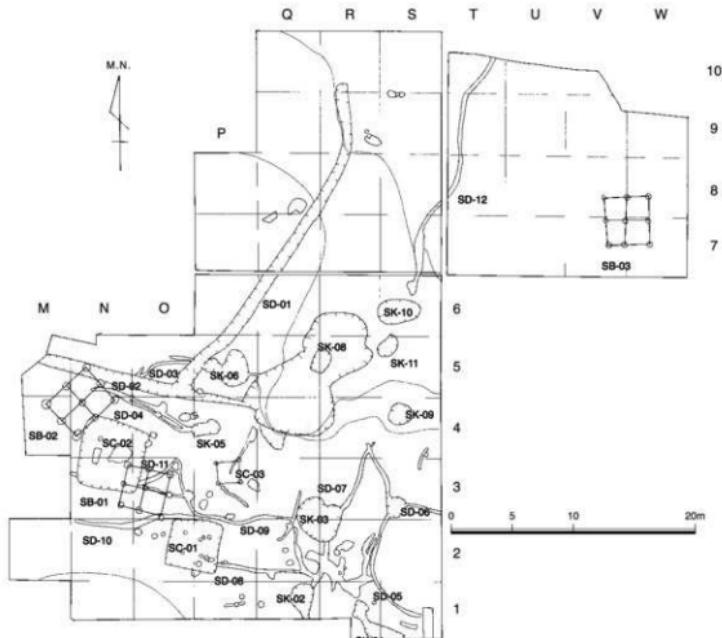


Fig. 3 戸切遺跡第3次調査遺構配置図 (1/400)

SB- 02 (第2号掘立柱建物)

M - 4・5・N - 4・5に検出した2間×2間の縦柱建物である。東西3.8m、南北4.5mを測る。SC- 02、SD- 02と重複関係にあり、いずれの遺構も切っている。

SB- 03 (第3号掘立柱建物)

V - 7・8・W - 7・8区に検出した2間×2間の縦柱建物である。東西3.5m、南北4.0mを測る。他の遺構から離れて調査区の北東部に単独で位置している。

SK - 01～10

調査区の全面にわたって11基を検出した。土抗はいずれも不整形、規模も大小がある。土抗が単独で存在するもの (SK - 09・10・11) と、幅20cm前後の小さな溝と連結したものの (SK - 01～08) の二者がある。土抗が単独で存在するものは連結している小さな溝が削平されて遺存していない可能性が考えられる。元々は小さな溝によって連結されていたと推定される。

SD - 01～12

前述したようにSD- 03～12は土抗と土抗を連結する小さな溝である。SD- 01・02は幅1m前後のやや大きな溝で、小さい溝を切り、SB- 02の柱穴に切られている。

以上の遺構は時期的に数時期にわたっている。最も先行するのは土抗とそれを結ぶ小さな溝で、出土土器から5世紀の後半が考えられる。次に来るのが竪穴住居址で6世紀代に比定できる。縦柱の倉庫は古代に比定できる。

第3次調査

1. 調査の概要

戸切遺跡は、早良平野の中央部を流れる室見川の中流左岸低位段丘の残丘上に立地する。本調査地は遺跡範囲の中央東寄りに位置し、老岐南小学校建設に伴う第1次調査地と市営住宅戸切第1住宅建設に伴う第2次調査地の間にあたる部分である。調査範囲は道路拡幅部分の調査として、幅約5m、長さ約35mを測る。発掘調査は、廃土を場外に搬出できないため調査区を二つに分け、先行して西側半分を調査し、後に廃土置き場を反転して東側半分の調査を行なった。平成20年9月1日に着手し、平成20年9月12日に調査を終了した。

2. 遺構と遺物

本調査地における基本層序は、現地表土から約40cmの盛土、旧耕作土、床土、洪水に由来すると考えられる30~40cm厚く堆積した砂、茶褐色粘質土の遺物包含層よりなる。遺構はその下の黄灰色粘質土上面にて検出された。この遺構面は、今調査区では西側に向けて緩やかに傾斜していた。建物基礎の抜き取りによる搅乱が著しかったが、ピット状遺構や土坑などの遺構を確認した。

西側調査区では、4穴のピット状遺構を検出した。各遺構からは、摩滅した土器の小破片が出土している。SP-01は長軸55cm、短軸40cmの楕円形を呈する平面形をしており残存する深さは45cmで、更に底面には直径約20cm、深さ約5cmの小穴がみられた。SP-02は直径約50cmの略円形を呈する平面形を有し、残存する深さは約17cmで、底面には更に35cmの深さを持つ小穴がみられた。SP-03、SP-04はどちらも黄褐色砂質土（粗砂混じり）を埋土とする。SP-03の平面形は直径約25cmの円形を呈し、残存する深さは約30cmである。SP-04の平面形は、直径約40cmの円形を呈し、残存する深さは12cmである。

反転した東側調査区ではピット状遺構以外に土坑が検出された。SK-05は長軸65cm、短軸50cm、深さ25cmの平面形が不定形を呈する。遺構の中央部から正置状態で完形の土師器鉢が1点出土した。鉢1は、口径14.5cm、器高6cmであり、外面器壁には横方向のヘラケズリ痕が残る。胎土は密で、径3mm以下の石英、長石を多く含んでいる。焼成は良好で、橙色を呈している。他に出土遺物は無い。遺構の性格は不明であるが、埋没時期は、出土遺物から古墳時代中期ごろと考えられる。SK-06は北側調査区壁際にて検出された黒褐色粘質土を覆土とする土坑である。確認された範囲は長軸約2m、幅1.2m、残存する深さは15cmである。土器片が出土しているが、土師器はやや摩滅しており、今回その内から須恵器4点を図化した。2は須恵器の壊蓋である。口唇部内側に明瞭な段を有しており、復元口径は12.0cmを測る。胎土は精良であり、ほとんど砂粒を含まない。焼成は良好であり灰色を呈している。3~4も須恵器の壊片である。3の胎土は密であり、1mm以下の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で青灰色を呈し、外器面には自然釉がみられる。4の胎土は密であり、2mm以下の白色砂粒を少量含んでいる。焼成は良好であり、灰色を呈している。5は壊ないしは甕の胴部破片である。器壁の厚さは5.3mmであり、胎土は密で径1mm以下の白色砂粒を少量含んでいる。焼成は良好で灰色を呈している。外器面には平行タタキの後カキ目が、内面には同心円紋のあて具痕

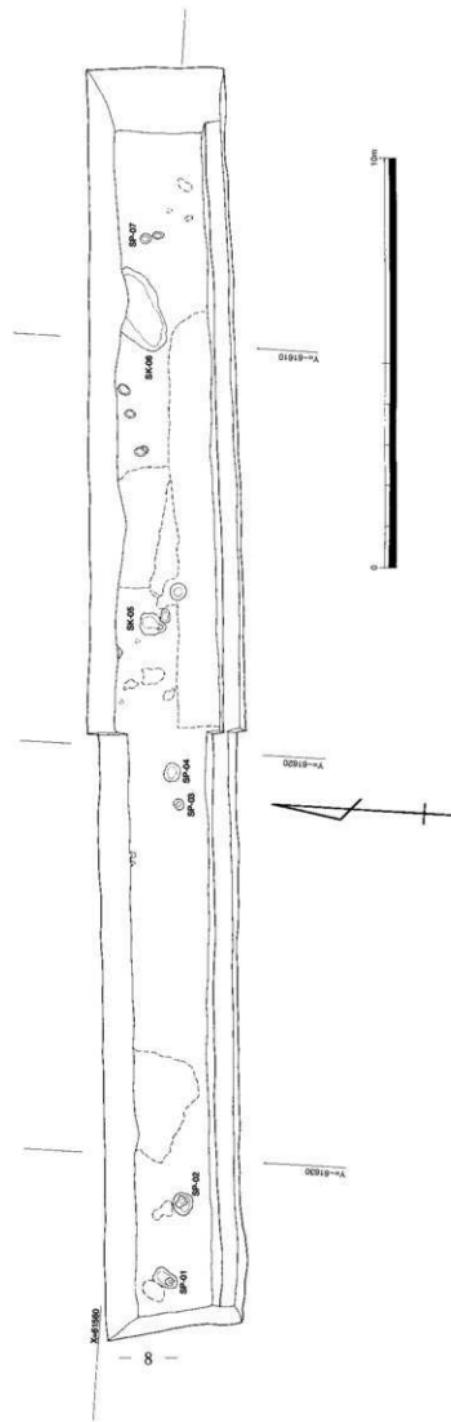
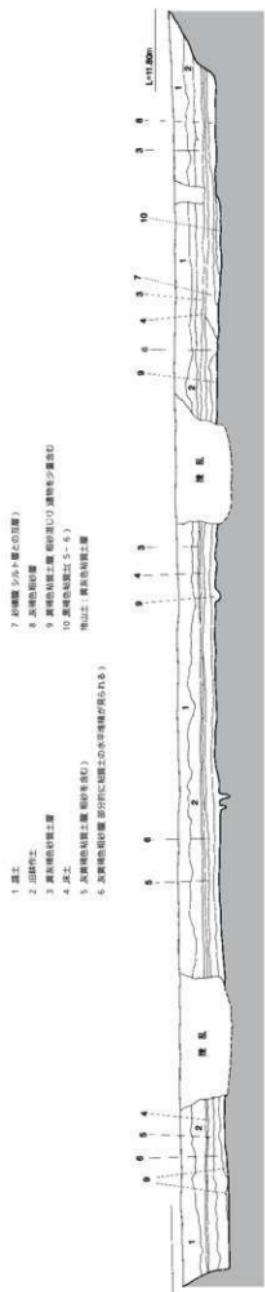


Fig. 4 戸切遺跡第3次調査遺構配置図 (1/120)

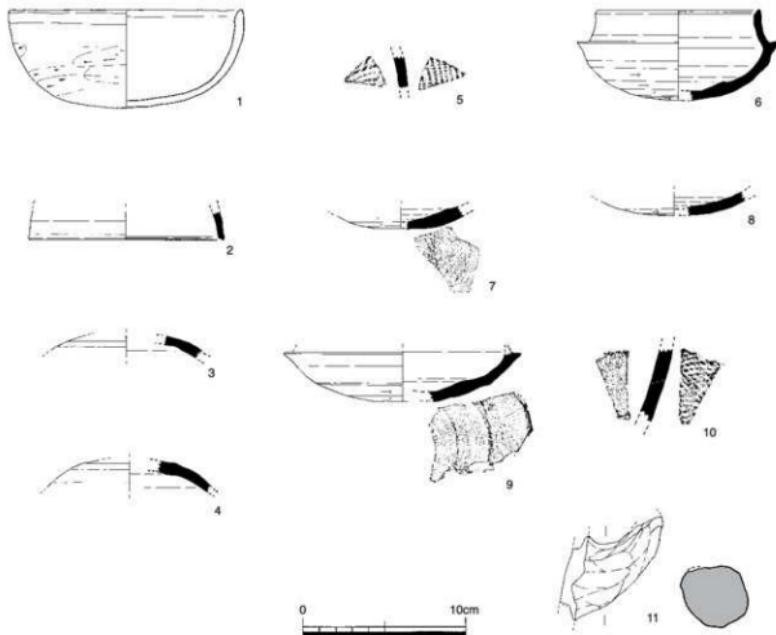


Fig. 5 戸切遺跡第3次調査出土遺物実測図 (1/3)

が残る。遺構の埋没時期は、出土遺物から古墳時代後期後半以降と考えられる。SP-07は直径約25cmの平面円形を呈するピット状遺構である。残存する深さは18cmである。遺構から土師器片が出土しているが、摩滅が著しく図化していない。

遺構検出面の上面を部分的に覆う茶褐色粘質土層から遺物が出土している。6は須恵器の坏身片である。口唇部に明瞭な段を有しており、復元で口径は10.2cm、蓋受け部径は12.4cm、器高5.5cmを測る。7～8も須恵器の坏片である。7の外器面上にはヘラ記号の一部がみられる。

その他、採集遺物には9～11がある。9は須恵器坏の破片である。受け部径は復元で14.6cmを測り、外器面上にヘラ記号がみられる。10は須恵器の甕ないしは壺の破片で、外器面上には平行タタキ痕がみられ、内面はナデ調整を行っている。11は瓶の把手部の破片である。胎土はやや粗であり、径4mm以下の石英、長石を多く含んでいる。

3.まとめ

調査面積が狭く、また検出された遺構の密度は決して高いものではないが、戸切遺跡第1次調査地点と第2次調査地点の間を埋める調査であり、古墳時代後期を中心とする遺構の遺存が見つかった。このことにより、当該期集落の存在が連続的に広範囲に広がっていることが確認された成果は重要である。今後の調査成果により戸切遺跡の集落構造などが明らかになることを期待したい。



Ph. 1 西側調査区全景(東から)



Ph. 2 西側調査区北側壁面状況(南西から)



Ph. 3 東側調査区全景(東から)



Ph. 4 東側調査区北側壁面状況(南東から)



Ph. 5 SK-05 遺物出土状況(南西から)



Ph. 6 出土遺物(縮尺不同)

第4次調査

1. 調査の概要

戸切遺跡第4次調査は市道戸切通線道路改良工事に伴う事前調査として2008年8月4日～2008年8月11日にかけて実施した。調査地点は戸切遺跡の東部で、南北方向に伸びる沖積微高地に位置する。調査区は道路拡幅部の、幅4.7m、長さ15.6mの東西方向に細長いものである。担当者は同じ敷地内において、個人住宅建設に伴う調査である戸切遺跡第5次調査を連続して実施した。4次調査の成果を理解するために、5次調査の概要についても後述したい。また、道路を挟んですぐ西は老岐南小学校の建設に伴い調査された1次調査地点である。報告書は未刊であるが、本書において概要を報告している。

調査グリッドの軸は調査区の長軸方向に近い任意のものを設定し、周辺の道路に設置されている基準点より国土座標（世界測地系）を測量した。連続して調査を実施した5次調査区も同じ調査グリッドを用いている。標高は老岐南小学校内の水準点を用いた。

戸切遺跡はこれまでの調査から、縄文時代～古代の遺跡と考えられるが、主体は古墳時代中期～後期である。本調査区は遺構密度が薄く、遺物もごく少量であったが、当該期のものとみられる溝1条、溝または土坑1基、小ピット多数を検出した。

2. 遺構 (Fig.6～8)

調査対象地は水田である。黒灰色耕作土と床土である灰色シルトの直下に地山の砂礫混黄褐色シルト層があり、これを遺構面とした(Fig.8)。GL-30cm前後、標高10.3m前後である。北にむけてやや低くなるが、5次調査区にかけてほぼ平坦といえる。遺構は東西方向の小溝1条(02)と溝または土坑1基(01)、直径10～30cm

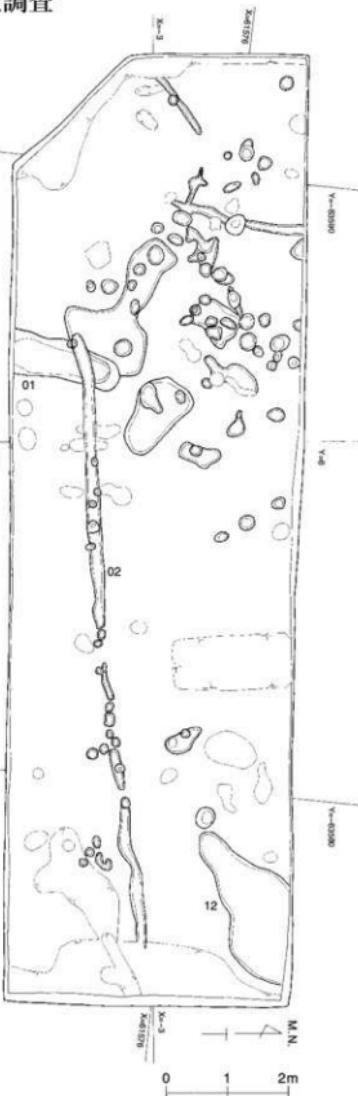


Fig. 6 4次調査区全体図 (1/80)

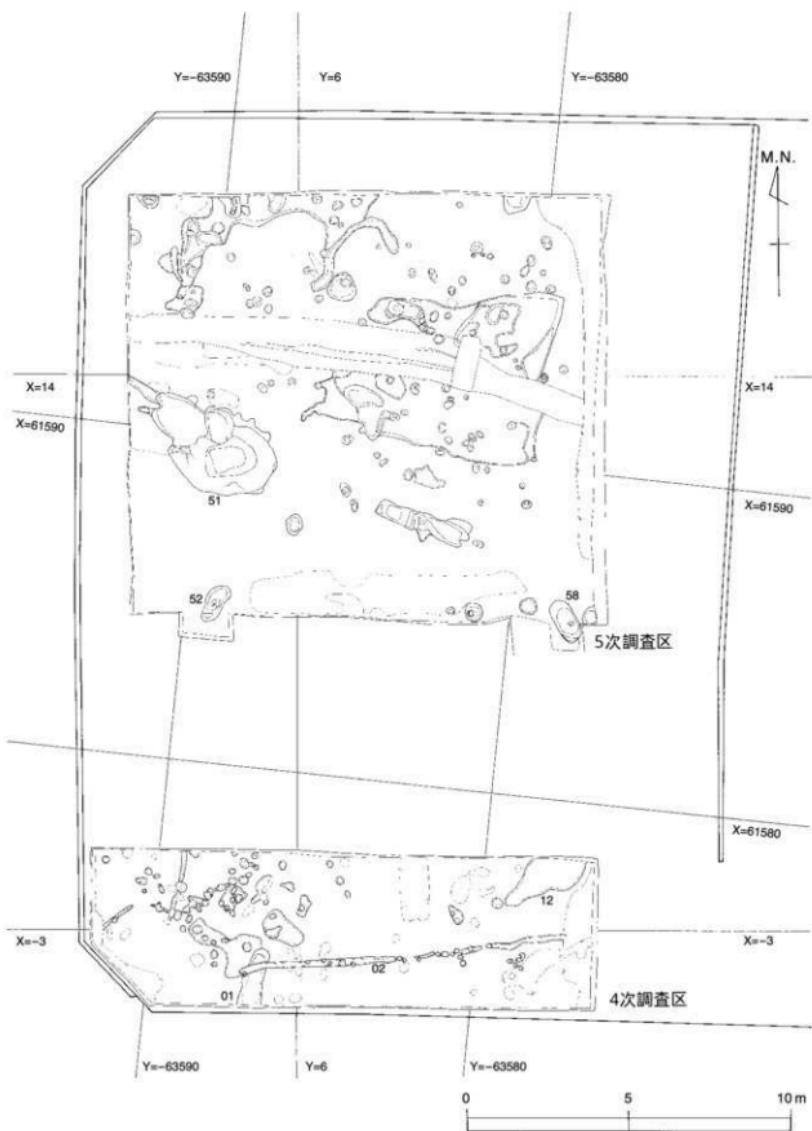


Fig. 7 4次調査区と5次調査区全体図 (1/150)

前後的小ピット多数を検出した。

柱穴の可能性のあるものは10基前後であろう。遺構の覆土はいずれも黒褐色シルトが主体である。

01は長さ1.8m以上、幅0.6m、深さ0.2mである。遺構の南部が調査区外に伸びているため、溝か土坑か定かではない(Fig. 8)。

遺構覆土は黒褐色シルトを主体とするもので、上層には15cm前後の棒状の礫などが含まれていた。出土遺物は古墳時代中期初頭前後の土師器小片である(Fig. 9-1~3)。

02は幅20cm前後、深さ5cm前後の中溝であり、長さ約10mを検出した。溝が途切れる箇所や、ピットが連接しているように見える箇所は後世の削平によるためであろう。1次調査区で検出されているような、水路状の中溝と考えられるが、遺存状況が悪く、底面の傾斜方向などは明らかにできなかった。古墳時代のものとみられる須恵器と土師器の小片が少量出土している。

3. 遺物 (Fig. 9)

出土遺物はコンテナケース1箱に満たない。遺跡の時期を示す遺物として図化したのは4点のみである。1~3は前述の01出土の土師器、4は浅い不整形な落ち込みであるSX12出土の須恵器。

1は直口の広口壺口縁部である。2は布留系甕または壺の体部である。3は精製の高杯脚柱部である。布留系土器の器壁は厚く、調整も丁寧ではない。高杯は長脚であろう。古墳時代中期初頭前後の土器群である。4は須恵器の甕の体部である。外面には繩文タタキが施され、内面はナデの下に青海波當て具痕がみられる。

このように、出土遺物は古墳時代後半の土師器と須恵器が主体である。他には弥生時代のものとみられる黒曜石の石核や剥片が32g出土している。

4. 小結

01は古墳時代中期の遺構であるが、5次調査の成果から溝ではなく、土坑しかも土坑墓の可能性が高いと考えている。その他の溝やピットは、同じく5次調査の成果から古墳時代後期前半が中心とみている。4次調査は狭小な調査区であり、出土遺物も少なかったことから、この調査成果のみから明らかにできることは少ない。上のような所見も同じ敷地内で調査を実施した5次調査の成果に基づくものである。よって4次調査と一連の調査である5次調査についても触れておく必要があるであろう。

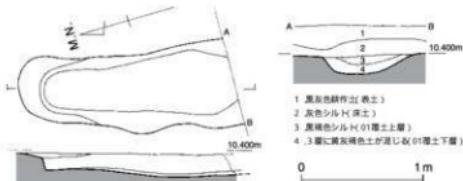


Fig. 8 01 実測図と調査区南壁土層図 (1/40)

3. 遺物 (Fig. 9)

出土遺物はコンテナケース1箱に満たない。遺跡の時期を示す遺物として図化したのは4点のみである。1~3は前述の01出土の土師器、4は浅い不整形な落ち込みであるSX12出土の須恵器。

1は直口の広口壺口縁部である。2は布留系甕または壺の体部である。3は精製の高杯脚柱部である。布留系土器の器壁は厚く、調整も丁寧ではない。高杯は長脚であろう。古墳時代中期初頭前後の土器群である。4は須恵器の甕の体部である。外面には繩文タタキが施され、内面はナデの下に青海波當て具痕がみられる。

このように、出土遺物は古墳時代後半の土師器と須恵器が主体である。他には弥生時代のものとみられる黒曜石の石核や剥片が32g出土している。

4. 小結

01は古墳時代中期の遺構であるが、5次調査の成果から溝ではなく、土坑しかも土坑墓の可能性が高いと考えている。その他の溝やピットは、同じく5次調査の成果から古墳時代後期前半が中心とみている。4次調査は狭小な調査区であり、出土遺物も少なかったことから、この調査成果のみから明らかにできることは少ない。上のような所見も同じ敷地内で調査を実施した5次調査の成果に基づくものである。よって4次調査と一連の調査である5次調査についても触れておく必要があるであろう。

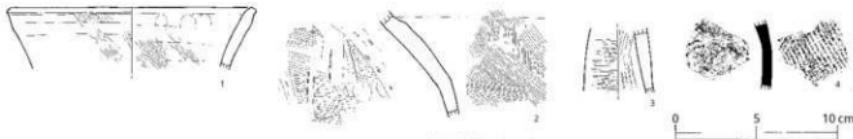


Fig. 9 01, 12 出土遺物 (1/3)

5. 第5次調査の概要

4次調査と同じ敷地内で、北に7mほど離れている(Fig.7)。2008年8月11日から9月9日にかけて実施した個人専用住宅建設に伴う調査であり、4次調査の直後に調査を行った。立地、基本層序、調査方法などについては4次調査と同じである。

遺構密度は高くないが、土坑2基、井戸(溜め井)1基、溝2条、竪穴住居の可能性がある不整形落ち込み3基、柱穴多数な

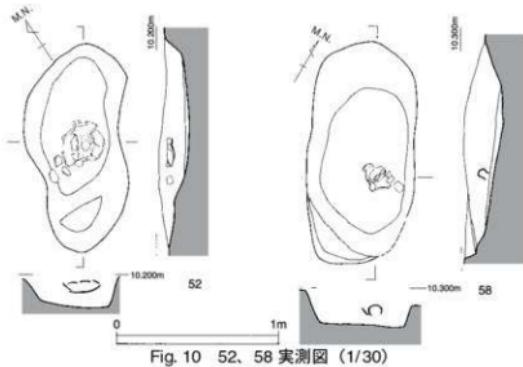


Fig. 10 52, 58 実測図 (1/30)

などを検出した。遺構の時期は古墳時代中・後期が主体である。

遺物は土師器、須恵器、木製品、黒曜石片などコンテナケース8箱分出土している。51(井戸)から出土した遺物が多い。遺構の時期は主として、Fig.11のような古墳時代中期初頭前後とFig.13のような古墳時代後期前半の2時期である。

古墳時代中期の主な遺構は第5図のような隅丸長方形ないしは小判形の土坑2基である。いずれも遺構の中央部付近から土師器がまとまって出土している。

52は長1.3m、幅0.6m、深0.2mの土坑で覆土は黒褐色粘質土の單一層である。出土土器はFig.11 1~5で、1の布留系甌は本来、完形に近い状態で埋没していたとみられる。ほかは破片で

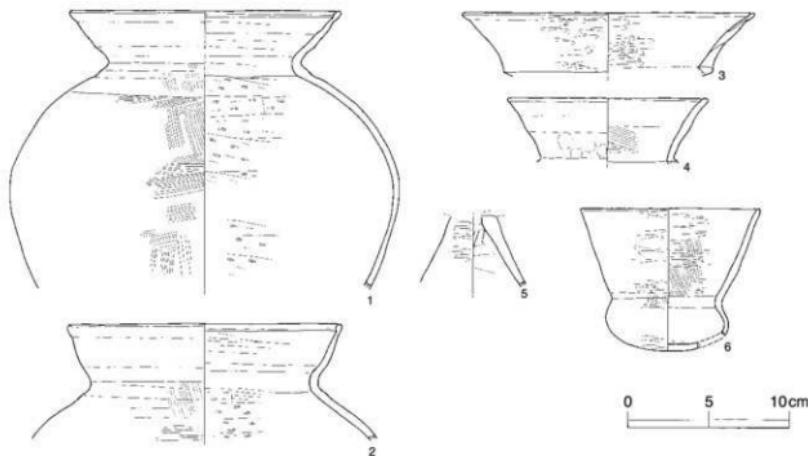


Fig. 11 52, 58 出土遺物 (1/3)

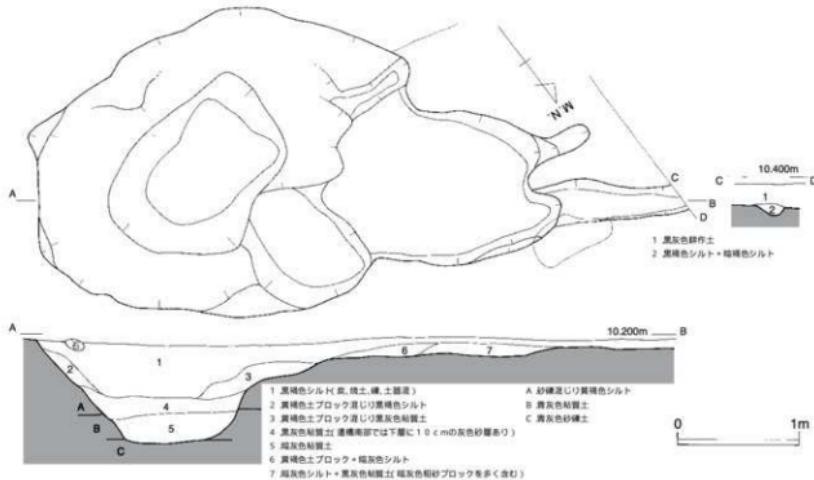


Fig. 12-51 実測図 (1/40)

の出土である。1、2は布留系甕であるが、この系統の甕では末期の型式である。4は直口の広口壺、5はX字形の小型器台である。3は二重口縁壺の口縁部小片であるが、他より古い様相を呈しており、古墳時代前期前半に上る可能性もある。

58は長1.3m、幅0.66m、深0.25mの土坑で、覆土は黒褐色粘土質土の単一層である。6の小型丸底壺が完形に近い状態で出土している。調整は比較的丁寧であるが、体部が扁平で口縁部が肥大化している型式である。他に甕の破片なども出土しているが、小片であり、図化に耐えない。

出土土器からこれらの土坑は古墳時代中期初頭前後の時期とみられる。また、遺構の形態や土器の出土状況から供獻土器を有する土坑墓である可能性が高いと考えている。

古墳時代後期の遺構ではFig.12のような溜め井状の土坑である51が注目される。ここからは古墳時代後期前半の土器群がまとまって出土している。他の遺構からは遺物の出土が少ないが、小溝、住居址状の落ち込み、柱穴などの多くはこの時期と考えられる。

51は湧水点の砂礫層まで掘り込まれた井戸状の遺構である。上面は長4.2m、幅2.5m、テラスから深く落ち込む部分はおよそ径2mであり、深さは遺構面から0.8mとなっている。土坑の西部には小溝が取り付いている。削平を受けた浅い溝であり、本来は土坑の東部に抜けていた可能性がある。

土層堆積はFig.12の通りで、覆土は黒褐色～暗灰色のシルト・粘質土を主体とするが一部に流水砂がみられる。湧水点である砂礫層にちょうど達するところが底面になっており、壁は地山のB層以下が還元化している。

このような特徴から51は取り付いている小溝と一連の構造をなす溜め井状の遺構と考えられる。小溝は水路であり、51はその給水を調整する施設であろう。このような土坑と小溝が連結する遺構は近接する1次調査地点でも3基以上出土しているようである。

51からはFig.13のような多量の土器が出土している。出土状況から51の埋没過程において廃棄されたものとみられる。土器以外では有柄木製品（棒鋤）が出土している。

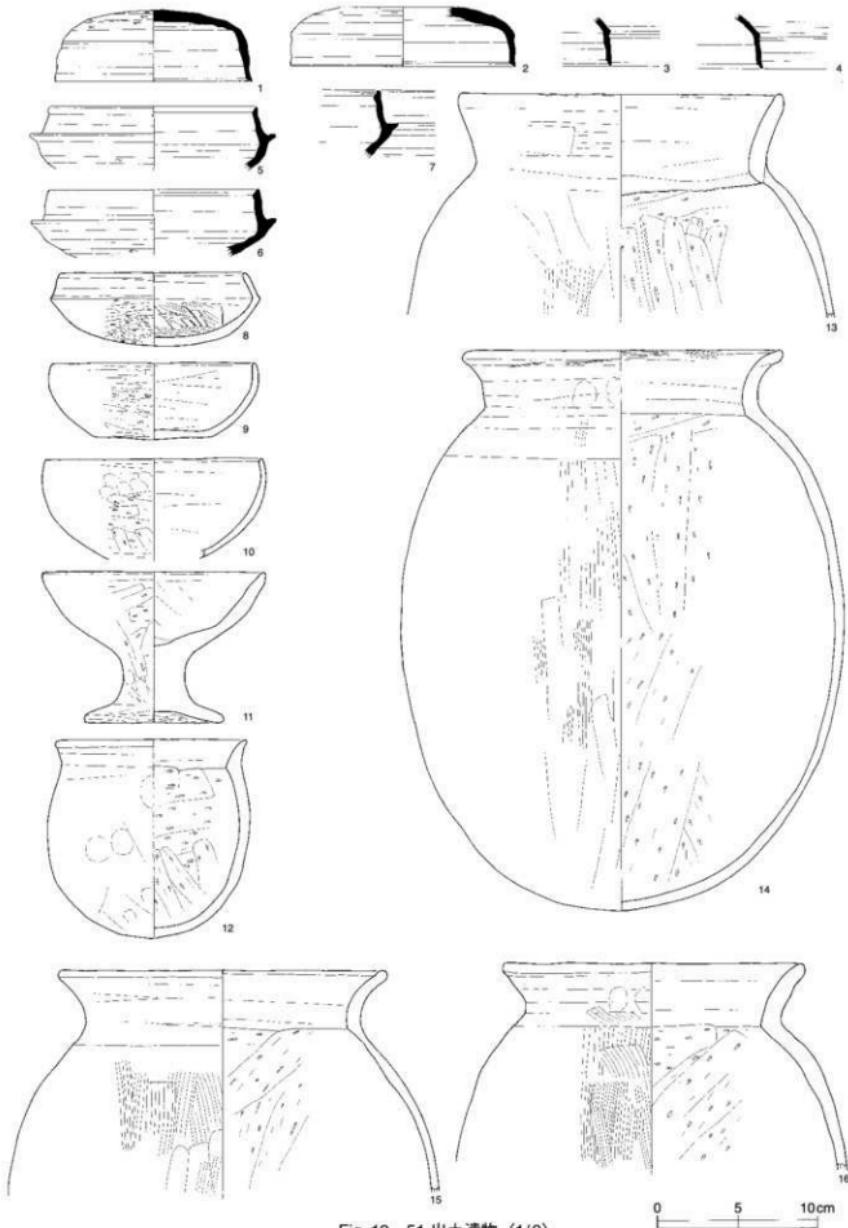


Fig. 13 51 出土遺物 (1/3)

Fig.13に51出土土器の主要なものを示した。

1～4が須恵器の杯蓋、5～7が須恵器の杯身である。砂粒を多く含む胎土で、暗灰色の色調のものが多い。須恵器は他に甕の体部片などがみられる。

蓋杯の口径は12～13cm前後で、口縁端部は明瞭な斜線ないしは段状をなす。蓋は側面の段や稜線が明瞭なものが多いが、1のように稜線が不明瞭になっているものもみられる。

これらは、小田富士雄氏の九州須恵器編年Ⅱ期、陶邑のMT15段階に併行するものと考えられる。8～16は土師器である。

8は模倣杯で内外面を黒化処理している。側面は段といよりは稜線をなし、口縁部が強く内傾するタイプである。9、10は内湾口縁の杯である。9は平底気味、10は丸底気味であろう。11は小型の低脚高杯である。調整の特徴は杯に準じるが、器壁は厚い。12は鉢ないしは小型の甕である。13～16は甕である。13は直口気味で口頭部が長いが、14のように口頭部が外反するタイプが主体である。全形の分かることは少ないが、長胴気味で丸底のものが多いとみられる。

甕については十分に抽出ができるおらず、図示していないが、これらの土師器は古墳時代後期的一般的な組成に近いものとみられる。

古墳時代後期前半の土器群は戸切遺跡2次調査でも報告されており、集落の主体をなす時期となっている。詳細が不明であるが、1次調査についてもこの段階の土器の出土が多く、遺構の主体をなす時期と考えられる。

4次調査については遺物が少なく、時期を特定し難い遺構が多いが、5次調査などの成果からみて、古墳時代中期初頭前後の土坑（ないしは溝）01以外はそのほとんどが古墳時代後期前半の遺構である可能性が高いと考えられる。



Ph.7 4次・5次調査地点調査前風景(北東から)



Ph. 8 戸切遺跡 4次調査区全景(上が東)



Ph. 9 戸切遺跡 4次調査区全景(上が南)



Ph. 10 調査区西部の 01 周辺(北から)



Ph. 11 01(南から)



Ph. 12 調査区南壁、01 の土層(北から)

6.まとめ

戸切遺跡の4次調査と5次調査から遺跡東部の様相がおおむね明らかになった。

弥生時代以前については、石器が少量出土しているのみである。谷を挟んで東には弥生時代の遺跡である兵庫遺跡や戸切巡り町遺跡があるが、戸切遺跡の位置する微高地上は基本的に弥生時代以前にはほとんど利用されていないようである。微高地の形成と安定化が周辺に比べて遅れるのであろう。

古墳時代中期初頭前後になってようやく遺跡の東部に土坑墓とみられるものが少しあるようになる。周辺には当該期の一般的な集落関連遺構が全くみられず、小規模な墓域としてのみ利用されていたと考える。

古墳時代後期初頭前後には遺跡全体で集落形成がなされるようになる。これまでの調査では1次と2次調査地点に住居などの建物遺構が集中しており、4次・5次調査地点は集落城縁辺の様相を呈している。しかし、5次調査でみつかった溜め井と考えられる土坑は注目すべき遺構であり、またここからは当該期の良好な一括資料が出土している。

古墳時代後期後半以降は再び、遺構や遺物が激減するようである。1次調査の2間×2間の総柱建物倉庫3軒は古代とされるが、2~5次調査地点では古墳時代後期より後の遺構が明らかでない。

4次・5次調査は戸切遺跡の東縁辺近くに位置する小さな調査区であったが、遺跡の消長を反映すると考えられる遺構変遷が明らかになり、戸切遺跡の調査が遺跡内のごく一部にとどまっている現状において、その成果は予想外に大きなものになった。



Ph. 13 5次調査全景(西から)

第4章 兵庫遺跡第2次調査

1. 調査の概要

兵庫遺跡は、今回の道路改良工事に伴い先行して行われた、埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査により発見された遺跡である。試掘調査の成果から、沖積地の中に残る微高地上に遺構の遺存があり、その範囲は一定の広がりをもつことが分かった。古地図・古写真等を参照しながら旧地形の復元をおこない、遺構の遺存が想定される範囲をこの遺跡の範囲としている。

遺跡は、早良平野のやや西寄りに位置している。早良平野は東側を油山山塊から延びる飯倉丘陵によって福岡平野と、西側を背振山塊から延びる長垂丘陵によって今宿平野と画されている。平野最深部の内野付近を要部とし、室見川を中心河川として開析され、博多湾に向かって扇状に展開する複合扇状地の平野であり、平野部では幾つかの小河川の開析による沖積扇状地を形成している。本遺跡は室見川中流域西岸の沖積微高地上に立地しており、東側には戸切巡り町遺跡、西側には戸切遺跡が位置している。

今回の調査地は、平成19年度に調査を行った兵庫遺跡の中間地にあたる。19年度の調査は2地点に分かれており西側の第1調査区（約370m²）では西側を中心に、弥生時代前中期から中期初頭の構造の異なる壁立ち建物を4棟検出している。第2調査区（約350m²）の地形は、西側から東側の谷部に向かって緩やかに低くなっている。大型掘立柱建物や、土坑からは多くの木製品が出土した。それ以外には古墳時代の溝、古代末の溝などが検出されている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1032集）。また、この章の末尾に第1次調査出土木製品の樹種同定報告を附録として掲載している。

今回の調査地は、第1次調査第2調査区の西側隣接地であり、幅約18mの道路新設部分にあたり、370m²の調査区を設定した。調査は平成20年8月1日に着手し、同年9月23日に終了した。

2. 遺構と遺物

遺跡の基本層序は、現地表面から約50cmの盛土、旧耕作土と床土下、灰茶褐色砂質土の弥生時代から古墳時代遺物を含む遺物包含層からなる。今回の遺構は、その直下の黄褐色粘質土層の上面にて検出された。遺構の密度は散漫であり、主にピット状遺構がみられた。調査区中央部南寄りの地点で2間×4間の掘立柱建物が確認された以外は、ピット状遺構は主に調査区の東寄りに多く遺存する状況がみられた。

SB-01

調査区中央部南端にて検出された2×4間の掘立柱建物である。建物範囲は調査区南側に広がっており、建物の方位は座標北より15° 東偏する。北東の1穴は確認されず、それ以外幾つかの柱穴では掘削前に10～15cmの柱痕跡がみられた。柱穴掘方の平面形は、主に円形を呈しており直径20～30cmを測る。残存する深さは7～19cmであった。梁行3.3m、桁行6.5mであり、梁行の柱間は芯～芯で1.51～1.52m、桁行の柱間は芯～芯で1.42～1.92mであった。SP-01からは土器片が1点出土しているが、細片のため時代等は不明である。

SP-06のピット状遺構からは、1の弥生土器の壺底部破片が出土している。SP-08とSP-09からそれぞれ弥生土器とされる遺物が出土しているが、細片のため時代等は不明である。調査区東側端にて検出されたSK-10は、黒褐色粘質土を覆土とする土坑と考えられる遺構であるが、遺

- | | | |
|------------------------|-------------------|-------------------------|
| 1. 塵土 | 7. 暗黃褐色粘土層 | 13. 暗青灰色粘土 |
| 2. 旧耕作土 | 8. 黄褐色粗砂層 | 14. 青灰色粘土 |
| 3. 旧耕作土 | 9. 黄茶褐色粘土層 | 15. 黄茶褐色粗砂層 粘土層が水平に堆積する |
| 4. 床土 | 10. 黄茶褐色粘土層 粗砂混じり | 16. 茶褐色粗砂層 |
| 5. 灰茶褐色粘土 (少量の遺物を含む) | 11. 暗黃褐色粘土層 | 17. 青灰色粘土層 |
| 6. Pt. 黑褐色粘土 (粗砂混じり) | 12. 黄灰色粘土層 | 18. 灰褐色粗砂層 |



Fig. 14 兵庫遺跡第2次調査遺構配置図 (1/120)

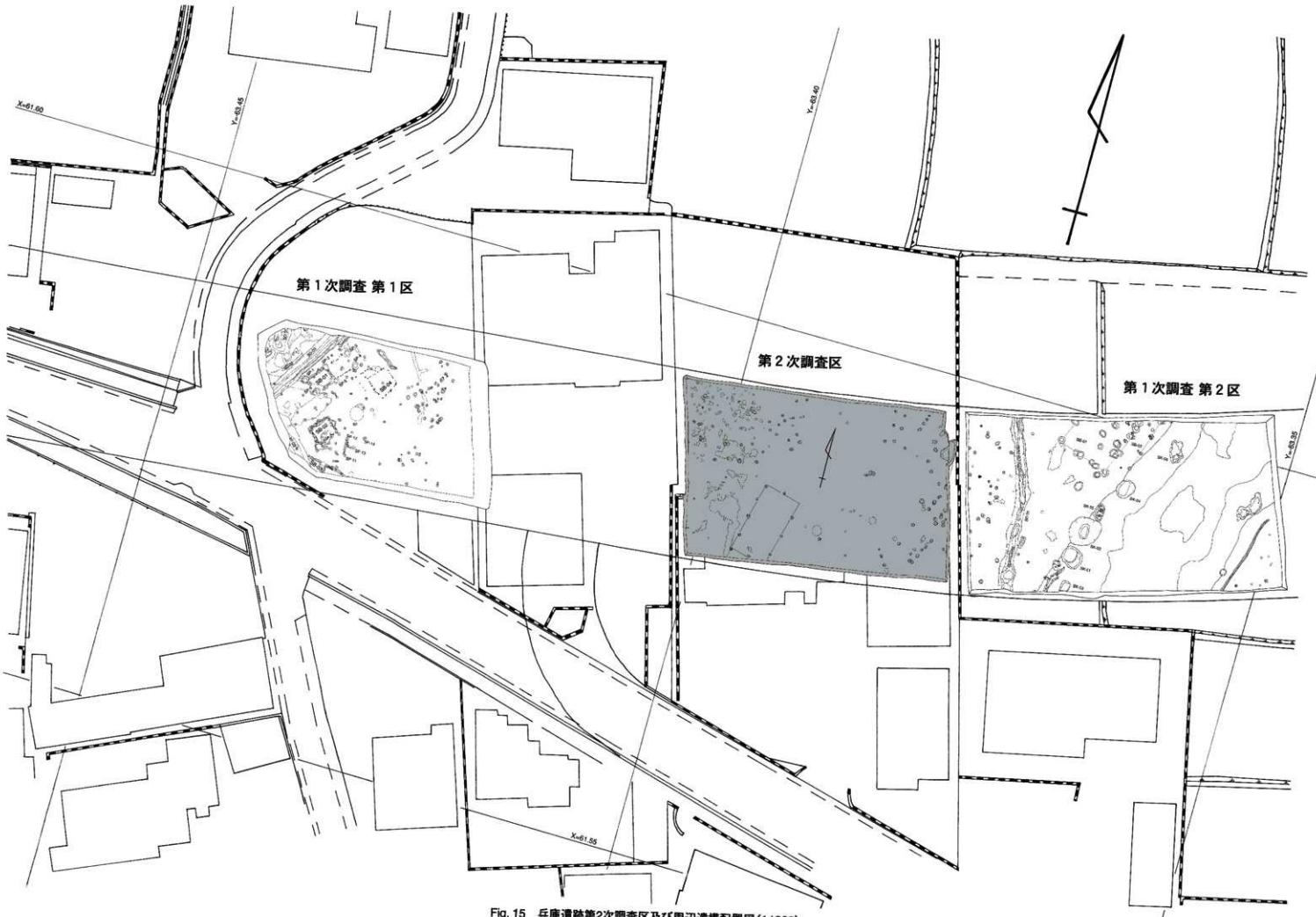


Fig. 15 兵庫遺跡第2次調査区及び周辺造構配置図(1/300)

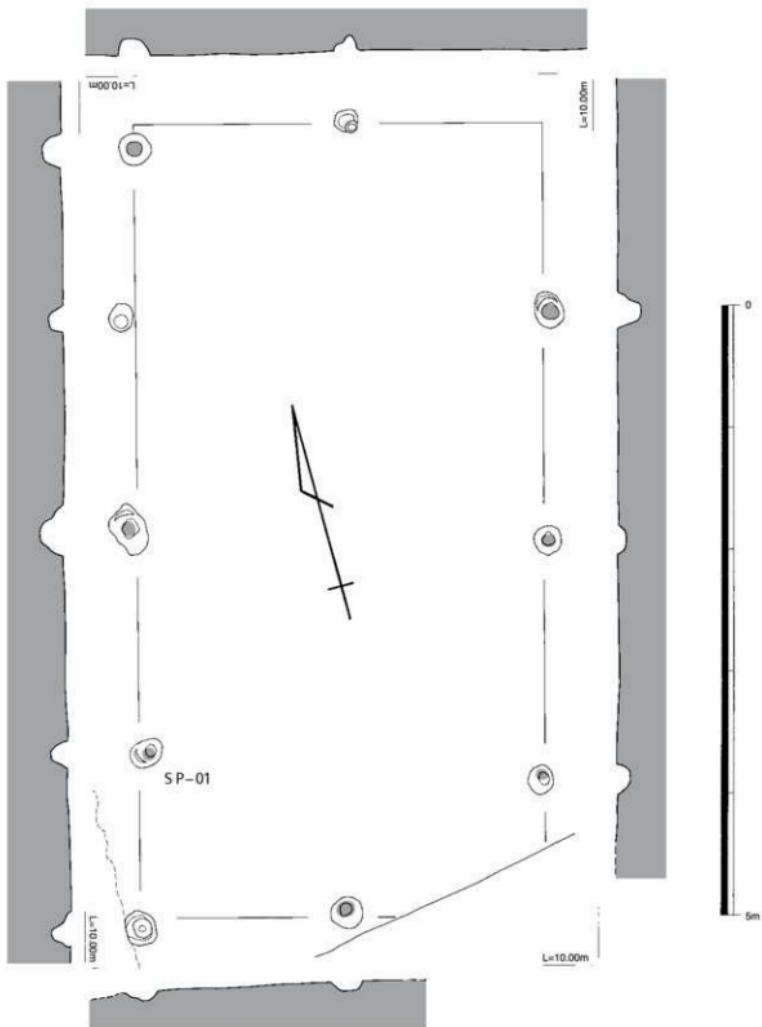


Fig. 16 SB-01 実測図 (1/40)

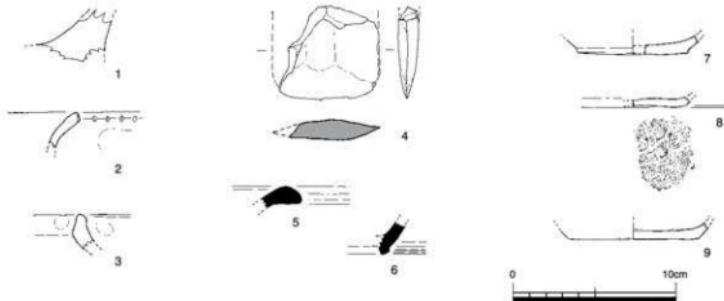


Fig. 17 兵庫遺跡第2次調査出土遺物実測図（1/3）

物は出土していない。

その他、調査中採集された遺物には以下のようなものがある。2は弥生時代前期の甕口縁部片である。口縁外側端部に粗く小さな刻み目がみられる。胎土はやや粗であり、径2mm以下の石英、長石、雲母を多く含み、外面はにぶい褐色を呈している。3は弥生時代の無頸壺の口縁破片と思われる。胎土はやや粗であり、径2mm以下の石英、長石を多く含み、器面は浅黄橙色を呈している。4は玄武岩製石斧の破片である。全面が風化しており、灰白色を呈している。5は須恵器の甕口縁破片と思われる。胎土は密で径1mm以下の白色、黒色砂粒を少量含んでおり、外器面には暗オリーブ灰色の自然釉がみられる。6は須恵器の高台付坏の破片である。胎土は精良で灰色を呈している。高台の断面形が略四角形で、体部の際につくことから9世紀代の遺物と考えられる。7～9は土師器小皿の破片である。7の底径は復元で6.8cmと考えられる。内外面とも摩滅が著しい。胎土は密で、径2mm以下の石英、長石の砂粒を多く含み、にぶい黄橙色を呈している。8の小皿の外底部には回転糸切りの痕跡がみられる。9の底径は復元で8.0cmと考えられる。胎土は精良で、1mm以下の石英、長石、黒色砂粒を少量含み、にぶい橙色を呈している。

3.まとめ

検出された遺構の密度は決して高いものではないが、弥生時代前期末から中期初頭を主体とする兵庫遺跡のほぼ中央部を東西にわたって調査することができた。本来微高地の頂部にあたり、集落遺跡の中心部を構成していたと予想される一帯は、後世の削平で遺構が削られていることが明らかとなつた。ただし、集落の縁辺部の遺構は良好に遺存しており、古代以降の遺物もみられることから、今後は生産域を含めた土地利用の解明と古代以降の遺構の検出が期待される。



Ph. 14 調査区全景(西から)



Ph. 15 調査区東側遺構検出状況(西から)



Ph. 16 SB - 01 検出状況(北から)



Ph. 17 出土遺物(縮尺不同)

4. 第1次調査出土木製品の樹種同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

兵庫遺跡は、室見川左岸の沖積地に位置し、弥生時代前期前葉～中期初頭や弥生時代前期末の遺構が検出されている。

今回の分析調査では、第2区SK-01, SK-02, SK-04 および谷内から出土した木製品の樹種を明らかにするために、樹種同定を実施する。

1) 試料

試料は、第2区SK-01, SK-02, SK-04 および谷内から出土した木製品 17 点で、全てPEGによる保存処理が施されている。

2) 分析方法

当社技術者が試料収蔵施設に赴き、木取りを観察した上で、採取箇所を水で湿らせた後、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。保存処理をしていない3点は、木取りを観察した上で、3断面の徒手切片を作製する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995, 1996, 1997, 1998, 1999）を参考にする。

3) 結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は、全て広葉樹で、分類群（コナラ属アカガシ亜属・クリまたはシイ属・タブノキ属・クスノキ科）に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリまたはシイ属 (*Castanea crenata Sieb. et Zucc. or Castanopsis*) ブナ科

加工の関係で木口面が小片しか採取できなかった。木口面の切片は晚材部のみで、多数の道管が火炎状に配列している様子が観察できる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

遺物の肉眼観察で環孔材あるいは環孔性放射孔材であり、観察した範囲で集合～複合放射組織は認められない。これらの肉眼観察結果と組織観察結果に一致する分類群はブナ科のクリあるいはシイ属であるが、明確に区別することができなかったため、クリまたはシイ属とした。

・タブノキ属 (*Persea*) クスノキ科

散孔材で、管壁は厚く、横断面では楕円形、単独および2～3個が放射方向に複合する。道管は單

表1. 樹種同定結果

遺物番号	地区	遺構	実測回数	樹種	木取り	樹種
84	第2区	SK-01	実測回2	諸手鎌未製品	梃目	コナラ属アカガシ亜属
85	第2区	SK-01	実測回2	不明板材	板目	クスノキ科
86	第2区	SK-01	実測回2	不明板状木製品	板目	クスノキ科
87	第2区	SK-01	実測回3	柾目未加工材	柾目	コナラ属アカガシ亜属
88	第2区	SK-01	実測回3	角柱状木製品	分割材	コナラ属アカガシ亜属
89	第2区	SK-01	実測回4	諸手鎌未製品	柾目	コナラ属アカガシ亜属
90	第2区	SK-01	実測回4	石斧柄（大型蛤刃石斧用）	分割材	モチノキ属近似種
91	第2区	SK-01	実測回4	エブリ未成品か	柾目	コナラ属アカガシ亜属
105	第2区	SK-02	実測回3	一木鋤柄	削出丸木	コナラ属アカガシ亜属
106	第2区	SK-02	実測回3	石斧柄（大型蛤刃石斧用）	分割材	コナラ属アカガシ亜属
107	第2区	SK-02	実測回4	木鎌	芯持丸木	クリまたはシ属
108	第2区	SK-02	実測回4	みかん削材	ミカン削	コナラ属アカガシ亜属
109	第2区	SK-02	実測回4	柱材（先端炭化）	芯持丸木	クスノキ科
110	第2区	SK-02	実測回5	不明未成品	半裁木	コナラ属アカガシ亜属
115	第2区	SK-04	S K - 04 出土遺物実側図	容器未成品	芯持丸木	タブノキ属
116	第2区	SK-04	S K - 04 出土遺物実側図	不明板状未成品	分割材	クスノキ科
158	第2区	谷内	谷内出土遺物実側図	木鎌	削出丸木	イスノキ

穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状、翼状および散在状。柔細胞はしばしば大型の油細胞となる。

・クスノキ科 (*Lauraceae*)

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2~3個が放射方向に複合して散在する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・イスノキ (*Distylium racemosum Sieb. et Zucc.*) マンサク科イスノキ属

木鎌（遺物番号158）の1点であり、加工の関係で、木口面の切片は採取できなかった。散孔材で、道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。道管、柔細胞、木繊維等の内部には茶褐色の充填物が顕著に認められる。

・モチノキ属近似種 (*cf. Ilex*) モチノキ科

試料は、石斧柄（遺物番号90）の1点。破損面から切片を採取したが、木口面の良好な切片が採取できなかった。散孔材で、道管は階段穿孔を有し、内壁にはかすかにらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~5細胞幅、1~40細胞高。

現生標本との比較から、モチノキ属が最も近い組織を有しているが、木口面における道管配列が観察できないこと等から確定できず、近似種とした。

4) 考察

木製品は、弥生時代前期前葉～中期初頭（SK-01、SK-04、谷内出土資料）と弥生時代前期末（SK-02出土資料）のものがある。木製品には、石斧柄（大型蛤刃石斧用）、諸手鎌未製品、一木鋤柄、エブリ未成品か、木鎌、容器未成品、建築材、柱材（先端炭化）、不明板材、不明板状木製品、不明板状未成品、柾目未加工材、みかん削材、角柱状木製品、不明未成品があり、器種は多岐に渡る。

石斧柄は、2点とも大型蛤刃石斧用の柄であり、分割材から削り出されている。SK-01の資料がモチノキ属近似種、SK-02の資料がアカガシ亜属で樹種は異なるが、いずれも強度の高い木材を利用している点では共通している。アカガシ亜属については、拾六町ツイジ遺跡（福岡市）で今回と同じ大型蛤刃石斧用の柄で確認された例がある（福岡市教育委員会、1983）。モチノキ属については、福岡市内では石斧柄に確認された事例が無いが、福岡県内では長野小西田遺跡2（北九州市）の弥生時代前期末～中期とされる石斧の直柄の未製品に確認された例がある（汐見・岡田、2001）。

農耕具である諸手鎌やエブリ（横鋸）からは、いずれも刃部が柾目板になる木取りである。一木鋤柄は、柄部のみで、削出丸木状となるが、形状・木取りから、欠損している刃の部分は柾目であったと

考えられる。これらの農耕具は、全てアカガシ亜属が利用されており、木取り・樹種共に、既存の調査事例と調和的である。

木鎌は、削出丸木状を呈し、重硬で強度が高いイスノキが利用されている。弥生時代前期の木鎌は、比恵遺跡（福岡市）の2例がいずれもイスノキに同定されており（福岡市教育委員会、1991）、今回の結果とも調和的である。

容器未成品は、タブノキ属の芯持丸木を利用しておらず、丸木の両端を削り貫いている。同様の事例が確認できないため、木材利用については今後の資料蓄積が必要と考える。

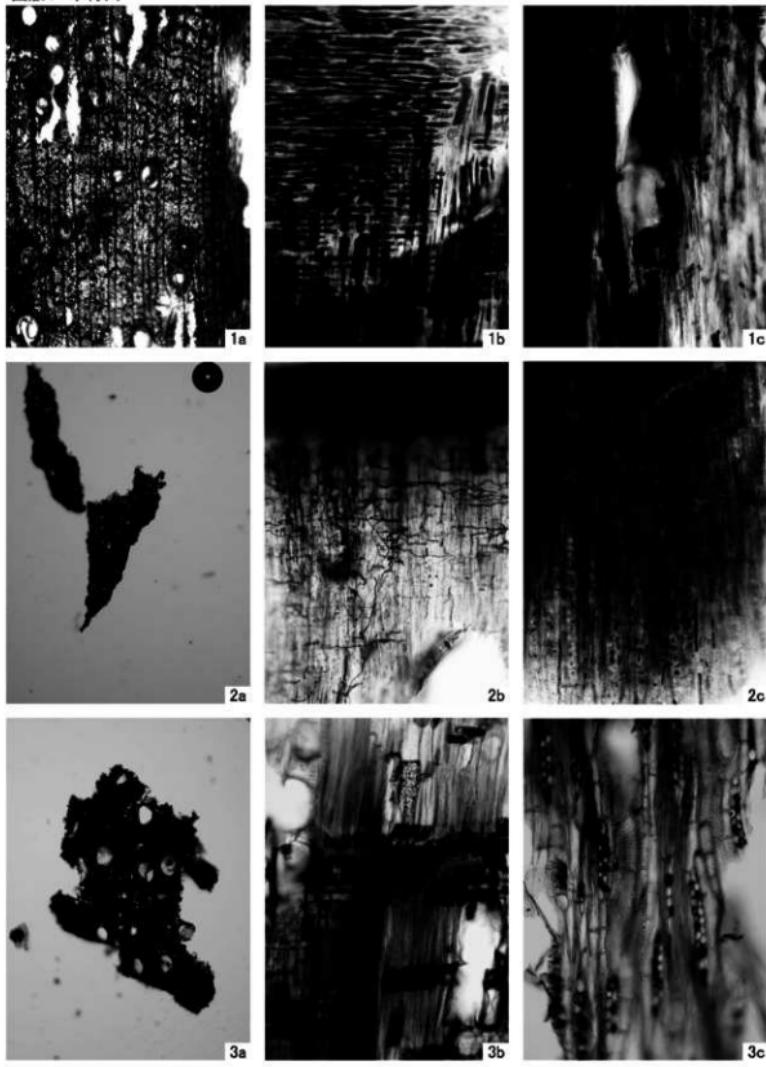
建築材は、芯持丸木で、樹木の枝分かれ部分を利用している。クリまたはシイ属であり、強度の高い木材を利用したことが推定される。一方、柱材は、クスノキ科の芯持丸木が利用されている。弥生時代前期の建築部材は、拾六町ツイジ遺跡で柱などの樹種同定を実施した例があり、クリ、ユズリハ？、モミ？、モチノキ？が確認されている（福岡市教育委員会、1983）。今回の結果から、クスノキ科の木材も利用されていたことが推定される。

この他の木製品は、いずれも用途が不明であるが、不明板材、不明板状木製品、不明板状未成品がいずれもクスノキ科であり、木材利用に共通性が認められる。また、柾目状木製品、角柱状木製品、みかん割材、不明未成品は、アカガシ亜属が利用されており、強度を要するような用途に利用された可能性がある。

引用文献

- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集, 京都大学木質科学研究所.
- 福岡市教育委員会, 1983, 拾六町ツイジ遺跡 福岡市城原小学校建設地内遺跡調査報告書, 福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集, 117 p. (1983)
- 福岡市教育委員会, 1991, 比恵遺跡群(10). 福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集, 246 p.
- 伊東 隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ, 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81 - 181.
- 伊東 隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ, 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66 - 176.
- 伊東 隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ, 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83 - 201.
- 伊東 隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ, 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30 - 166.
- 伊東 隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ, 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47 - 216.
- 島地 謙・伊東 隆夫, 1982, 図説木材組織, 地球社, 176 p.
- 汐見 真・岡田 文男, 2001, 長野小西田遺跡出土木製品の樹種、「長野小西田遺跡2 北九州市総合運動公園建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告4」, 北九州市埋蔵文化財調査報告書第262集, (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室, 266 ? 274.
- Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト, 伊東 隆夫・藤井 智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122 p. [Wheeler E. A., Bass P. and Gasson P. E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

図版1 木材(1)



1. コナラ属アカシ亜属(遺物番号106)

2. クリまたはシイ属(遺物番号107)

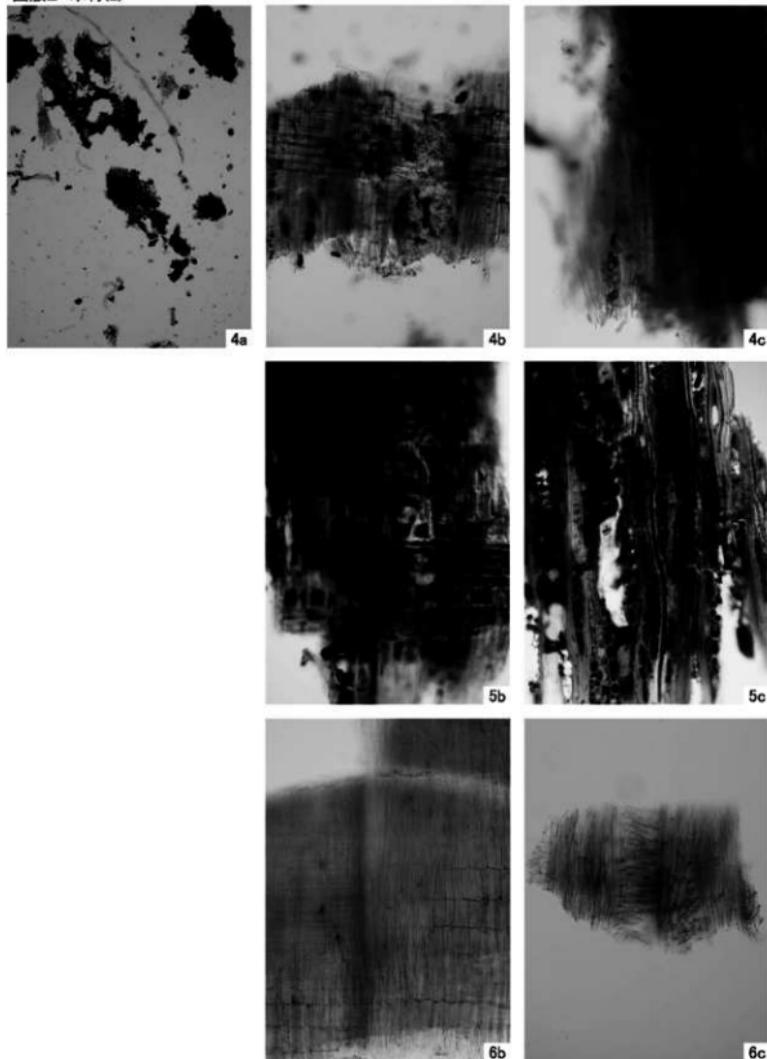
3. タブノキ属(遺物番号115)

a:木口, b:径目, c:板目

300 μ m:a

200 μ m:b,c

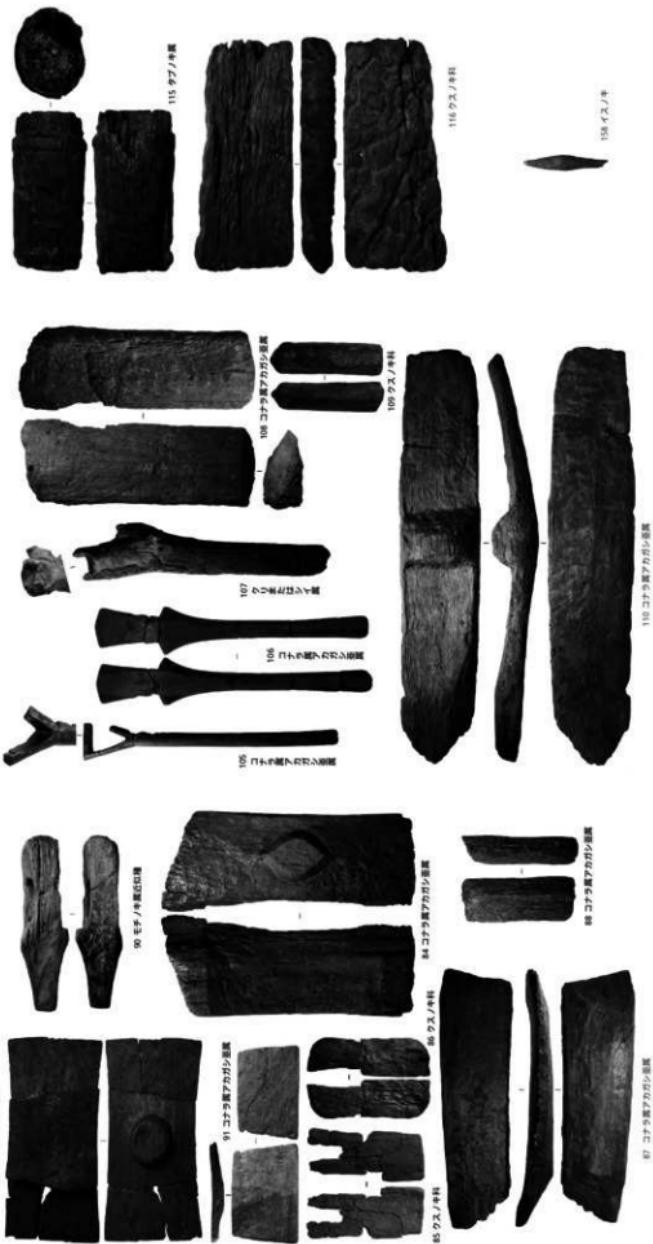
図版2 木材(2)



4. クスノキ科(遺物番号86)
5. イスノキ(遺物番号158)
6. モチノキ属近似種(遺物番号90)
a:木口, b:柾目, c:板目

300 μ m:a
200 μ m:b,c

藏書者



第5章 戸切巡り町遺跡第2次調査

1. 調査の概要

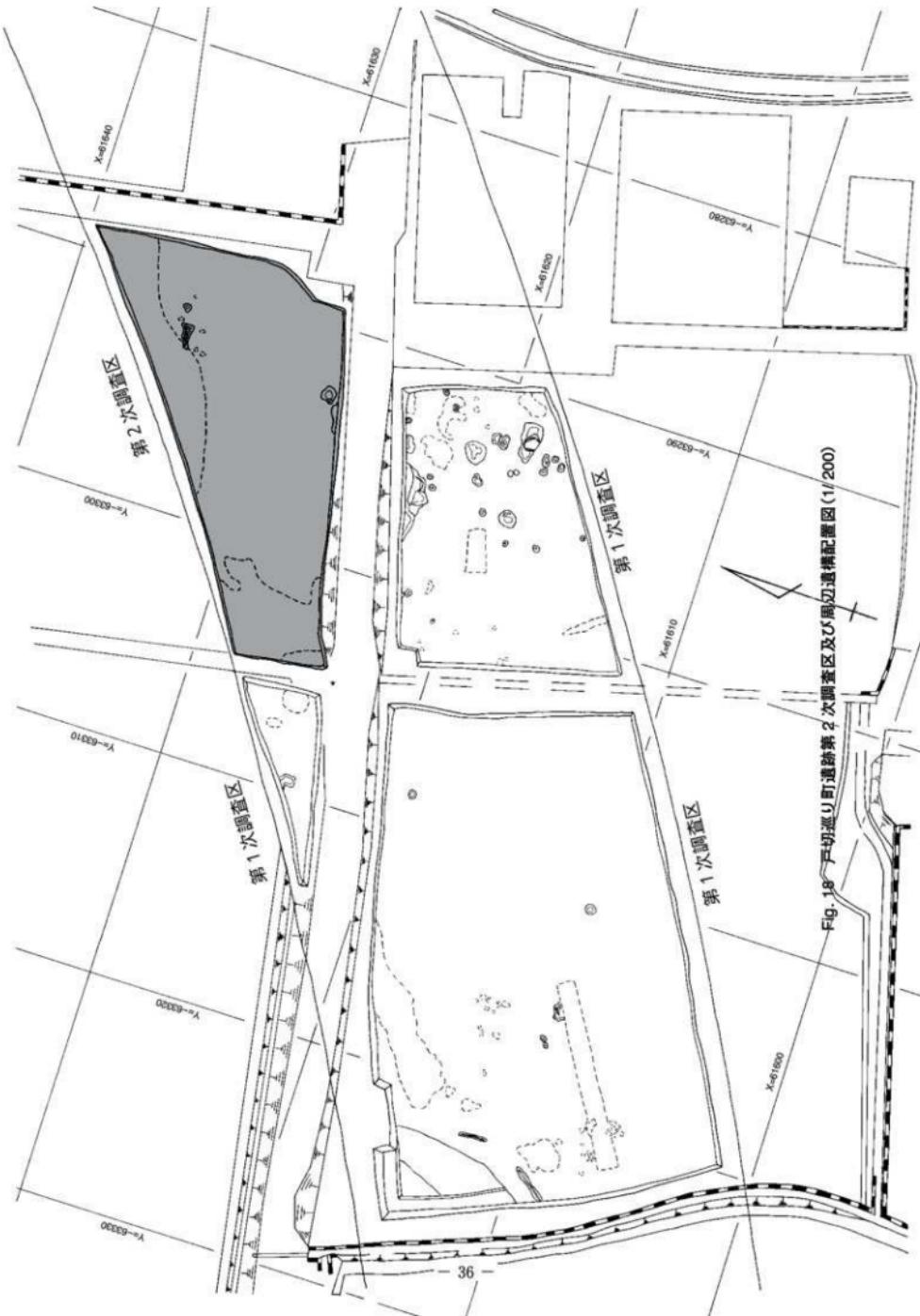
戸切巡り町遺跡は、早良平野のほぼ中央部西寄りに位置する。早良平野は東側を油山山塊から延びる飯倉丘陵によって福岡平野と、西側を背振山塊から延びる長垂丘陵によって今宿平野と画されている。平野最深部の内野付近を要部とし、室見川を中心河川として開析され、博多湾に向かって扇状に展開する複合扇状地の平野であり、平野部では幾つかの小河川の開析による沖積扇状地を形成している。本遺跡は室見川中流西岸の沖積微高地に立地しており、西側には兵庫遺跡、北側には橋本榎田遺跡、東側には上籠遺跡が位置している。

現在も、道路改良工事に伴う工事範囲を対象に継続的に試掘調査が行われている。平成19年度は、上籠遺跡第1次調査、兵庫遺跡第1次調査、戸切巡り町遺跡第1次調査を行なっており、それぞれの地点の沖積微高地上にて、弥生時代から中世に至る各時代の遺構や遺物を確認している。今回の調査地点は、平成19年度時未買収地であったため未調査となっていた第1次調査第1調査区の農道を挟んだ北側隣接地である。平成20年10月16日に表土剥ぎ作業に着手し、遺構検出作業を行った。前年度調査同様遺構の分布は散漫なものであった。遺構検出面の上層は遺物を含む砂質土層となり腐蝕土層を含む旧地表土層は確認されず、遺構面の後世の削平度合いは不明である。遺構検出面は、あくまで沖積地での安定面であることから遺構掘削終了後に調査区東側に南北方向のトレーニングを設定し、遺構検出面の更に下層の確認のため断ち割り作業を行った。下層には安定面がみられず、人為的遺物も出土しないことを確認して同年10月23日に調査を終了した。

2. 遺構と遺物

遺跡の基本層序は、現地表面から約20cmの耕作土と床土、弥生時代から中世にいたる遺物を含む茶褐色砂質土の遺物包含層である。遺構検出面は、その直下の黄褐色シルトと黄褐色粗砂を主体とする安定層である。その面にて、ピット状遺構や不定形土壤を数基検出した。この安定面は、調査区の北側に向けて緩やかに傾斜していた。よって、更に北側の低地への落ち際には遺構が良好に遺存する可能性を有している。

今回検出された遺構状のものがすべて人的な掘削によるものかどうかは不明であり、図化できる良好な遺物は出土しなかった。以下に図示するものは、主に遺構検出面の上面を覆う茶褐色砂質土層からの採集遺物である。1は弥生時代前期の甕胴部破片である。胎土はやや粗であり、径3mm以下の石英、長石、黒色砂粒を多量に含み、色調は橙色～褐色を呈している。2は弥生時代の甕底部破片である。内外面とも摩滅が著しい。胎土はやや粗であり、径5mm以下の石英、長石の砂粒を多く含んでいる。焼成はやや不良で、色調はにぶい橙色～灰褐色を呈している。3は須恵器甕の胴部破片である。器壁の厚さは6mmを測る。外器面には擬格子タタキ目がみられ、内面には同心円紋とて具の痕跡とその上をタタキ工具によりナデ調整した跡がみられる。胎土は密であり、径1mm以下の白色砂粒を多く含み、焼成は良好であり赤灰色～灰白色を呈している。4は須恵器の甕または甕の胴部破片である。器壁の厚さは7mmを測る。外器面はタテ方向の平行タタキの後ヨコナデ調整を行っており、内面には同心円紋のて具痕がみられる。胎土はやや粗であり、径5mm以下の白色砂粒を多く含み、外面には暗オーリーブ灰色の自然釉が付着している。5は須恵器の环身破片であり、復元口径は13.5cmを測る。胎



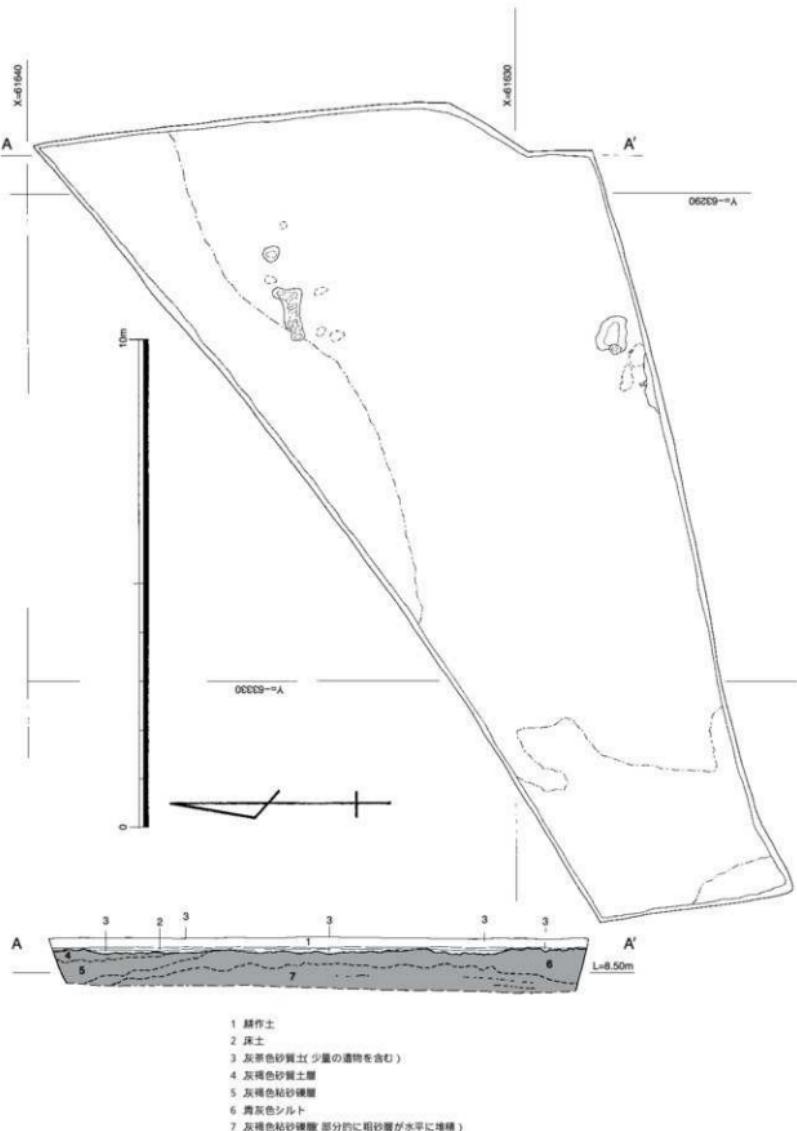


Fig. 19 戸切巡り町遺跡第2次調査遺構配置図(1/100)

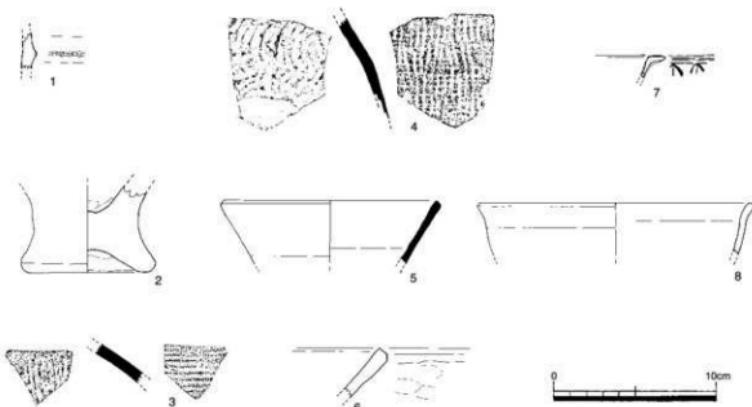


Fig. 20 戸切巡り町遺跡第2次調査出土遺物実測図(1/3)

土は精良で、径1mm以下の白色砂粒を少量含んでいる。焼成は良好で、外器面にはオリーブ灰色の自然釉がみられる。6は土師器のこね鉢破片である。胎土は密で、径2mm以下の石英、長石、黒色砂粒、雲母を多量に含んでいる。焼成はやや不良で、にぶい橙色を呈している。7は龍泉窯系青磁碗の破片である。胎土は精良で砂粒を含まず硬質で灰白色を呈する。釉薬は灰オリーブ色を呈している。8も龍泉窯系青磁碗の破片である。口径は復元で17.0cmを測るものと思われる。胎土は精良で灰白色を呈し、釉薬はオリーブ灰色を呈している。

3.まとめ

検出された遺構の密度は決して高いものではないが、遺物包含層には弥生時代からの遺物がみられ、小谷を挟んだ西側には良好な木製遺物がみつかった兵庫遺跡が位置することから、弥生時代前中期から中期初頭期の集落や活動痕跡の存在がうかがえる。また、中世遺物もみられることから既期の遺構の検出も期待される。今回の調査は狭小なものであったが、今後の調査により弥生時代の集落構造や中世の集落構成などが明らかになることを期待したい。



Ph. 18 調査前風景



Ph. 19 調査区全景(南東から)



Ph. 20 調査区全景(南西から)



Ph. 21 遺構面断ち割り状況(南西から)



Ph. 22 出土遺物(縮尺不同)

- 報告書抄録 -

書名	市道戸切通線工事に伴う発掘調査報告書 2			
ふりがな	しどうとぎれとおりせんこうじにともなうはくつちょうさほうこくしょ 2			
副書名	-戸切遺跡第3次調査- -戸切遺跡第4次調査- -兵庫遺跡第2次調査- -戸切巡り町遺跡第2次調査-			
卷次				
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書			
シリーズ番号	第1081集			
著作者名	山崎純男 森本幹彦 加藤隆 (編)			
編集機関	福岡市教育委員会			
発行機関	福岡市教育委員会			
発行年月日	20100323			
作成法人ID	40130			
郵便番号	810-8621			
住所	福岡市中央区天神1-8-1			
遺跡名	戸切遺跡第3次	戸切遺跡第4次	兵庫遺跡第2次	戸切巡り町遺跡第2次
ふりがな	とぎれいせきだい3じ	とぎれいせきだい4じ	ひょうごいせきだい2じ	とぎれめぐりまちいせきだい2じ
遺跡所在地	西区戸切2丁目地内	西区戸切2丁目地内	西区戸切2丁目地内	西区戸切2丁目地内
市町村コード	40130	40130	40130	40130
遺跡番号	0402	0402	2846	0403
北緯	33° 33' 10"	33° 33' 11"	33° 33' 12"	33° 33' 12"
東経	130° 18' 52"	130° 18' 54"	130° 19' 01"	130° 19' 06"
調査期間	20080901~20080912	20080804~20080808	20080801~20090923	20081016~20081023
調査面積	105	70	370	121
調査原因	道路改良工事	道路改良工事	道路改良工事	道路改良工事
種別	集落	集落	集落	集落
主な時代	古墳時代	古墳時代		古墳時代
遺跡概要				
特記事項				



調査終了後風景

表紙写真 調査区周辺と早良平野奥部を望む
(2008(平成20)年 2月19日撮影航空写真)
裏表紙写真 調査区周辺と志摩半島を望む
(2008(平成20)年 2月19日撮影航空写真)

市道戸切通線工事に伴う 発掘調査報告書 2

- 戸切遺跡 第3次調査 -
- 戸切遺跡 第4次調査 -
- 兵庫遺跡 第2次調査 -
- 戸切通り町遺跡 第2次調査 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1081集
2010(平成22)年3月23日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 末松印刷株式会社
福岡市博多区東那珂2丁目4-36

— Results of the 3rd excavation of Togire sites —

— Results of the 4th excavation of Togire sites —

— Results of the 2nd excavation of Hyogo sites —

— Results of the 2nd excavation of Togiremegrinmati sites —

Report of Archaeological Investigations of Fukuoka city, Vol.101

THE BOARD OF EDUCATION OF FUKUOKA CITY

2010

JAPAN